

長 浜 温 故 知 新 プ ロ ジ ェ ク ト

# 長浜の 企業人列伝

～知恵と努力が“みらい”をつくる～

長浜の近代化が  
まるるわかりの  
一冊！

長浜の近代化を  
支えた老舗企業

長浜近代化の立役者





長 浜 温 故 知 新 プロ ジ ェ ク ト

# 長浜の企業人列伝

～知恵と努力が“みらい”をつくる～





# 「長浜の企業人列伝

～知恵と努力が“みらい”をつくる～

をご覧の皆さんへ

皆さんは、長浜市のことをどれだけ知っていますか？

長浜市は、美しい自然や豊かな歴史・文化、たくましい産業などの特色を持つ、個性あふれるまちです。戦国時代には、姉川合戦や賤ヶ岳合戦など、歴史の表舞台に登場したことはよく知られていますが、明治時代に入り、長浜が全国にさきがけて近代化に取り組んだことをご存知でしょうか。

滋賀県で初めての小学校の開校や国立銀行の開業、鉄道の敷設など、明治時代の長浜はめざましい発展をとげました。そして、こうした取り組みは、すべて長浜の発展を願う市民の知恵と努力によって進められてきたものです。

この冊子は、明治時代以降の長浜の主なできごとや、長浜を発展させるために汗をかき、知恵をしぼった先人、多くの困難を乗り越え今も活躍されている、さまざまな業種の老舗企業など、長浜のまちづくりの歴史をまとめたものです。

これからの長浜をつくる若いみなさんに、今につながる長浜の魅力や素敵などを知ってほしい。そして、生まれ育った長浜を誇りに思ってもらいたい。次の世代へと受け継いでいってほしい。そんな願いを込めて作りました。

この冊子が、皆さんにとって大切なふるさとの歴史を知り、長浜の今や未来のことを考えるきっかけになれば幸いです。

2020年（令和2年）3月

長浜市長 藤井勇治



# 目次 Contents

## I. 長浜の近代史

近代化の原動力・交通 (蒸気船の運航と鉄道の敷設)	6
近代化に向けた教育 滋賀県で初めての小学校	8
長浜の経済を支えた銀行の設立	10
長浜の近代化を支えた産業	12
引札にみる長浜のにぎわい	14
長浜の近代化遺産	16

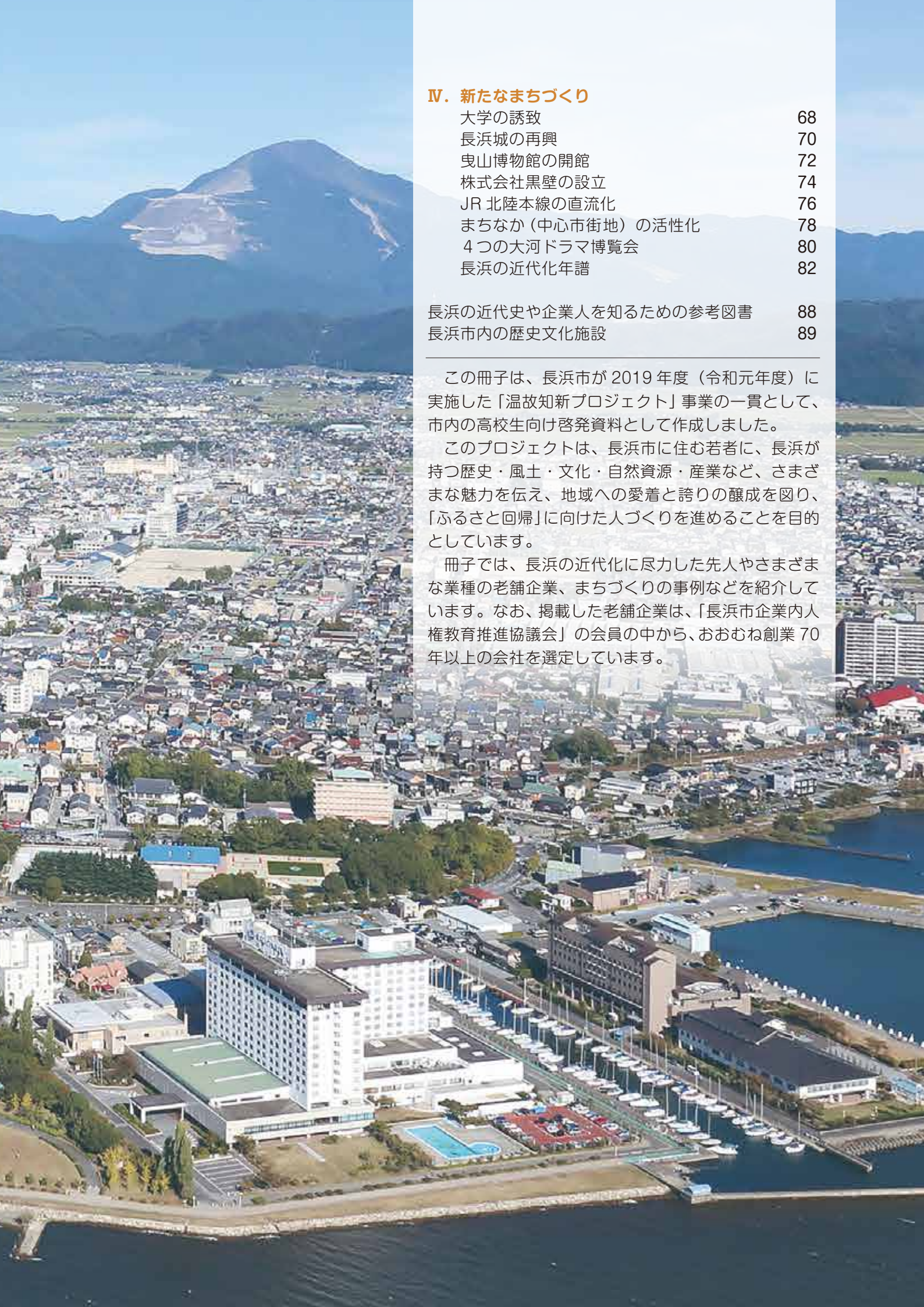
## II. 長浜の創業者たち (50 音順)

浅見又蔵	23
安藤與惣次郎	25
大塚吉平 (吉兵衛)	26
大塚篤太郎・大塚誠次郎	27
大村彦太郎	28
押谷惣助	29
川島孫一郎	30
小堀林衛	31
柴田源七	32
下郷傳平久道・下郷傳平久成	33
富田八郎忠明	35
中辻源太郎	36
中村寅吉	37
西田天香	38
松田正二	40
松本藤十郎	41
山岡孫吉	42
吉村孫三郎	44

## III. 長浜の老舗企業 (創業年順)

大塚産業グループ	46
江一株式会社	47
南久ちりめん株式会社	48
株式会社山正	49
近江ベルベット株式会社	50
琵琶倉庫株式会社	51
カネ上株式会社	52
株式会社材光工務店	53
江洲産業株式会社	54
長浜信用金庫	55
明文舎印刷商事株式会社	56
ハヤミ工産株式会社	57
KBセーレン株式会社 長浜工場 (旧鐘紡)	58
株式会社山久	59
東亜工業株式会社	60
株式会社材信工務店	61
株式会社立売堀製作所	62
エルナープリントドサーキット株式会社	63
ワボウ電子株式会社	64
高橋金属株式会社	65
セネファ株式会社	66





#### IV. 新たなまちづくり

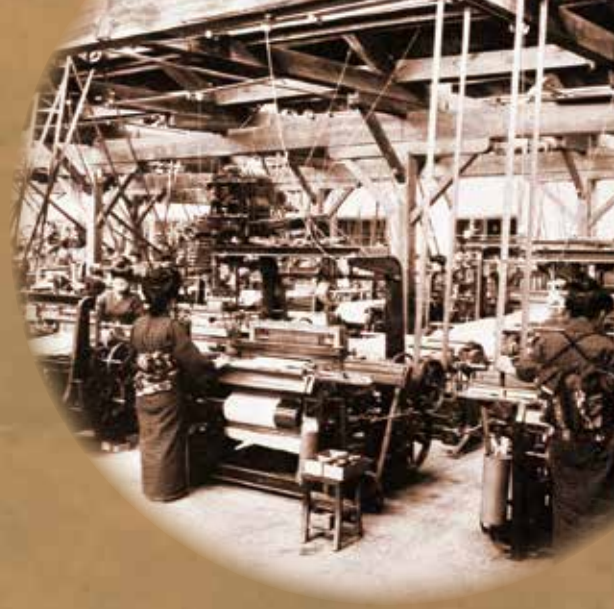
大学の誘致	68
長浜城の再興	70
曳山博物館の開館	72
株式会社黒壁の設立	74
JR 北陸本線の直流化	76
まちなか（中心市街地）の活性化	78
4つの大河ドラマ博覧会	80
長浜の近代化年譜	82
長浜の近代史や企業人を知るための参考図書	88
長浜市内の歴史文化施設	89

この冊子は、長浜市が2019年度（令和元年度）に実施した「温故知新プロジェクト」事業の一貫として、市内の高校生向け啓発資料として作成しました。

このプロジェクトは、長浜市に住む若者に、長浜が持つ歴史・風土・文化・自然資源・産業など、さまざまな魅力を伝え、地域への愛着と誇りの醸成を図り、「ふるさと回帰」に向けた人づくりを進めることを目的としています。

冊子では、長浜の近代化に尽力した先人やさまざまな業種の老舗企業、まちづくりの事例などを紹介しています。なお、掲載した老舗企業は、「長浜市企業内人権教育推進協議会」の会員の中から、おおむね創業70年以上の会社を選定しています。





# I. 長浜の近代史





## 近代化の原動力・交通 蒸気船の運航と鉄道の敷設



明治時代になり、世の中が大きく変わりました。政府は、西洋の進んだ制度や文化などを積極的に取り入れ、国の近代化を進めました。近代的な社会では、大量に人や物を運ぶ交通手段が欠かせません。そのため、道路や鉄道の整備が急務となりました。

琵琶湖を抱く滋賀県では、1869年（明治2年）に琵琶湖にはじめての蒸気船「一番丸」が登場しました。船体に大きな水車をつけた蒸気船が、湖上を堂々と進む姿に、当時の人々は新たな時代の到来を実感したことでしょう。

これを機に、琵琶湖は汽船ブームとなり、湖岸の各港でも次々に汽船が造られ、琵琶湖周辺は大変な賑わいを見せました。1874年（明治7年）9月までに湖上へ就航した汽船は15艘で、そのほとんどが県内で造られたもので、県内の汽船会社や個人が所有していました。

長浜では、1871年（明治4年）に小船町の尾板六郎が蒸気船を購入し、翌年から「湖龍丸」として、大津－長浜間を就航しました。その後も「長運丸」や「湖東丸」が造られました。

しかし、汽船の増加は激しい競争を生み、港同士の争いや痛ましい事故も起こりました。そこで、県では汽船の検査や運航を管理するた



長浜汽船湖東丸図 長浜城歴史博物館蔵（中村ヨシコレクション）



め、1876年（明治9年）に「汽船取締会所」を設立し、長浜にもその支局が設けられました。また、乗客の定員数や荷物の取扱い、報笛<sup>ほうてき</sup>やマスト点灯など、汽船の安全運航に関する規則も定められました。

一方、陸路の主役は、蒸気機関車でした。当時の日本政府は、鉄道の建設に必要な技術、資金、資材が充分ではなく、イギリスの支援を受けながら、国をあげての一大プロジェクトとして取り組みました。1872年（明治5年）9月、新橋（東京）－横浜（神奈川）間（約29キロメートル）に日本で最初の鉄道が開通し、1874年（明治7年）には大阪－神戸間が開業、1877年（明治10年）には神戸－京都間が全通しました。

こうした中、長浜では吉田長作<sup>よしだちようさく</sup>を代表とする町民有志が1877年（明治10年）に「長浜停車場」の設置を求めて請願書を提出しています。また、浅見又蔵<sup>あさみまたぞう</sup>は、長浜に鉄道が敷設<sup>ふせつ</sup>された後のことを見越して、長浜－関ヶ原間の私設鉄道の敷設許可や長浜港の修港許可を求めました。このように、長浜の人々はいち早く世の中の動きをつかみ、長浜を発展させるため鉄道の誘致を積極的に行っていたのです。



旧長浜駅舎「写真集 長浜百年」より

1882年（明治15年）3月10日、待望の長浜－敦賀（金ヶ崎）間の鉄道が柳ヶ瀬トンネル部分を除いて開通、同時に長浜駅も開業しました。さらに、同年5月には、琵琶湖上の大津－長浜間で鉄道連絡船が就航しました。当初の運航ダイヤは1日2便、2年後にトンネルが完成するまで、乗客たちは長浜－柳ヶ瀬間（滋賀県側）まで蒸気機関車に乗り、そこから徒歩で山を越え、再びトンネル出口（福井県側）にある洞道口<sup>どうどうぐち</sup>－敦賀間は蒸気機関車を利用したそうです。煙をはきながら湖北平野を走る“陸蒸気”は、まさに文明開化の象徴でした。

その後、1884年（明治17年）に難工事であった柳ヶ瀬トンネルが完成。トンネルの長さは全長1,352メートルで、当時の日本最長の鉄道トンネルでした。現役で使われているトンネルとしては2番目に古く、現在は道路トンネルとして活躍しています。

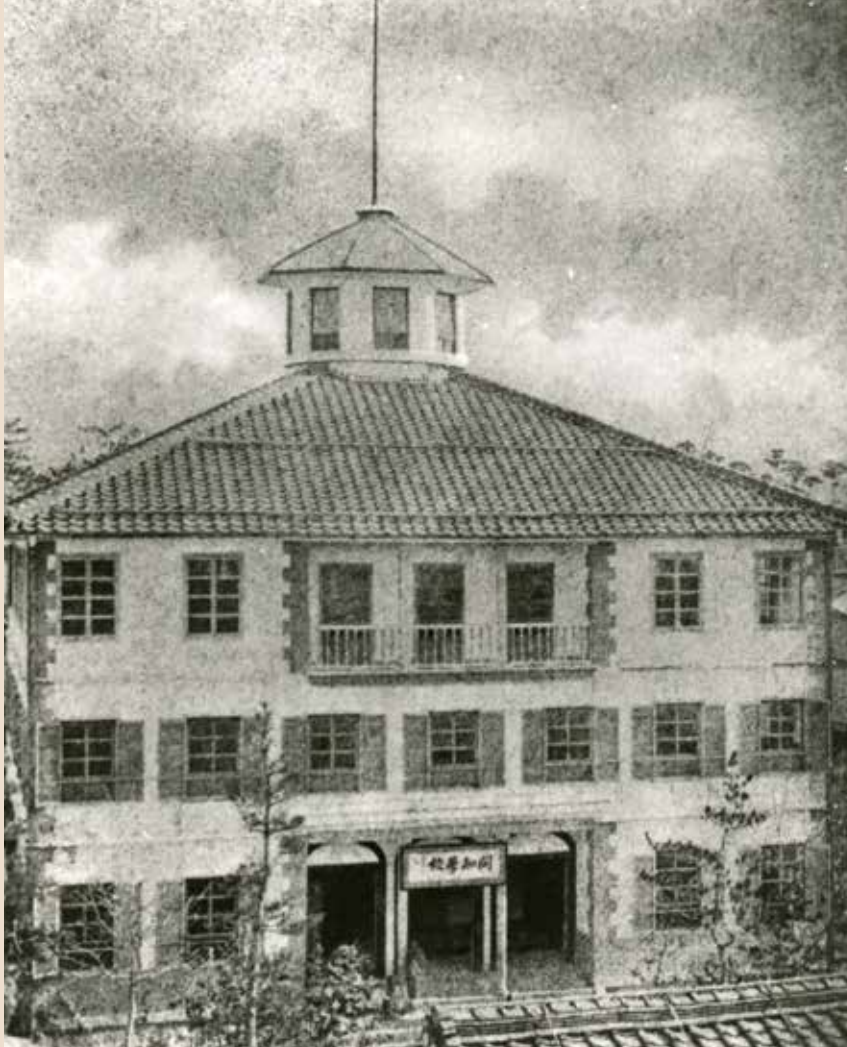
また、長浜－敦賀間の鉄道開通と同じごろ、長浜から東へ向けての鉄道も敷設されました。浅見又蔵が請願した長浜－関ヶ原間の鉄道で、1883年（明治16年）5月に開通し、その翌年には大垣までルートが延びました。さらに、1880年（明治13年）から実施されていた長浜港の改修工事も完成し、記念式典が盛大に行われました。

鉄道敷設と鉄道連絡船の運航により、関西と東海・関東、北陸との間を往来する人々は、長浜駅で汽車と鉄道連絡船に乗り換えることになり、長浜駅は人やモノが集まる水陸交通のターミナル駅となりました。駅前には旅館や運送店、飛脚屋などが軒を連ね、長浜は鉄道と鉄道連絡船のまちとして、にぎわいました。

その後、1889年（明治22年）、米原－大津間と米原－関ヶ原間の路線が開通したことで、東京から米原を経て神戸を結ぶ東海道線が全通し、長浜駅のターミナル駅としての役目は終えましたが、日本に残る最も古い駅舎として、今も往時の姿を私たちに見せてくれています。



## 近代化に向けた教育 滋賀県で初めての小学校



開知学校外観

明治政府は、欧米諸国に負けな  
いように国の力を強くし、産業を  
盛んにするためには、まず国民の  
教育が重要だと考え、それまでの  
寺子屋に代わって、全国の町や村  
に学校をつくることにしました。  
1872年（明治5年）には「学制」  
という新しい教育制度をつくり、  
「必ず<sup>むら</sup>邑に<sup>ふがく</sup>不学の戸なく、家に不  
学の人なからしめ<sup>き</sup>ん事を期す（必  
ず村に学ばない家が一軒もなく、  
家には学ばない人が一人もいない  
ようにすることを期待する=すべ  
ての人が学ぶべきものである）」  
の理想を<sup>かか</sup>掲げ、広く全国に公立の  
小学校を設置することが推進され、子どもたちは身分や性別に関  
係なく平等に教育を受けられるよ  
うになりました。

日本の多くの地域では、この

「学制」の公布によって小学校を設置しましたが、長浜では、それに先立つ1871年（明治4年）9月9日にすでに小学校が設立されていました。これが現在の長浜市立長浜小学校の前身で、県下最初の小学校であったことから、「第一小学校」と命名されました。この小学校の設立を主導したのは、<sup>あさみまたぞう</sup>浅見又蔵ら長浜の有力者で、西本町（現在の長浜市元浜町）にあった<sup>しもむらとうえもん</sup>下村藤右衛門の邸宅を校舎として用いました。第一小学校は、ほかに5つの支校（江戸時代の寺子屋）があり、子どもたちは授業の内容に応じて、本校と支校を行き来しました。

その後、「学制」の公布により、それまでに比べ児童数が増加、教科内容も多様になったため、1874年（明治7年）に神戸町（長浜市元浜町）に木造3階建ての校舎を新築し、「開知学校」と命名しました。資料によると、校舎の建設費は総額3,732円98銭で、そのうち3,167円74銭1厘は、地元の人々からの寄附金でした。これは、総工費の8割以上が地元からの寄附金によってまかなわれたということで、県下随一の経済力を誇っていた長浜だからこそ実現したことであり、同時に、長





開知学校の設計図（明治時代） 長浜城歴史博物館蔵（中村林一コレクション）

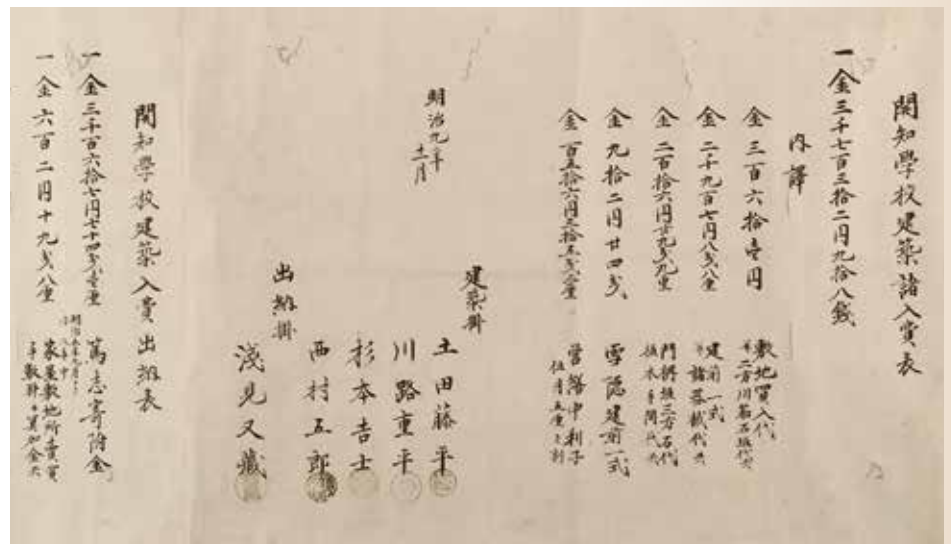
開知学校の設計図（明治時代） 長浜城歴史博物館蔵（中村林一コレクション）  
 ていた時報用の太鼓は、現在も長浜小学校で大切に保管されています。

開知学校が新築されたころの児童数は約500人でしたが、その後も増加の一途をたどり、1884年（明治17年）3月には、本校の北側に木造2階建ての校舎（北舎）が新築されました。1886年（明治19年）には「小学校令」が公布され、学校名を「長浜学校」と改称、1893年（明治26年）には高等科が設置され、「長浜尋常高等小学校」となりました。

その後、児童数の増加により、1903年（明治36年）、現在の長浜小学校の敷地である高田町に新築移転されました。新たに完成した校舎は、校庭を中央にして南・西・北の各棟が「コ」の字型をしており、敷地はおよそ200ヘクタール、工事費は総計73,364円だったそうです。小学校は、1941年（昭和16年）に「長浜国民学校」となり、1947年（昭和22年）に「長浜市立長浜小学校」と改称され、現在に至ります。

1871年（明治4年）に県で初めての小学校として開校して以来、長浜の近代化の歩みとともに変遷を重ねながら、地域で活躍する多くの人材を輩出しました。

長浜の子どもたちの成長を見守り続けた開知学校の校舎は、1937年（昭和12年）に現在の場所へ移築され、2000年（平成12年）、当初に近い姿に復原されました。今も店舗や会議室として活用されており、明治の長浜を象徴する建物の一つとして地域の人々に親しまれています。



開知学校の建築費用がわかる資料（1876年） 長浜小学校蔵



## 長浜の経済を支えた銀行の設立



第二十一国立銀行

1868年（明治元年）、明治時代が幕を開け、欧米からさまざまな文化が取り入れられました。天皇を中心とする統一国家が成立し、さまざまな改革が行われ、社会も大きく変化します。いわゆる「明治維新」です。

経済面では、経済の基礎となる統一的な貨幣制度を確立するため、「新貨条例」が公布され、円・銭・厘の十進法を採用し、硬貨を発行しました。

また、実業家の渋沢栄一が中心となって、1872年（明治5年）、「国立銀行条例」が制定され、アメリカのナショナル・バンクにならった近代的な銀行制度が日本に導入されました。国立銀行は、国の法律に基づいて設立された、民間の株式組織（株式を発行し、広く多くの人々から資金を集めること）の銀行です。

長浜では、1877年（明治10年）12月15日、長浜に「第二十一国立銀行」が開業しました。場所は、当時の坂田郡長浜神戸町（現在の長浜市元浜町）、現在の長浜市曳山博物館の南側あたりです。この第二十一国立銀行は、全国で21番目、滋賀県で最初の国立銀行でした。発起人は松本とうじゅうろう、なかむらやじゅうろう、いしいしろうへい、しばたげんしち、あさみまたぞう、なかむらきへい、かわじゅうへい、にしじょうごろう、かたおかちゅうへい、しもごうでんべい、くつみずぶんない、しばたげんざぶろうの12人です。

この銀行の最も大きな特徴は、銀行設立に向け中心的な役割を担い、資本金10万円を出資した発起人が地元の有力商人であったということでしょう。全国的には旧華族や士族の出資で設立された国立銀行が多い中、第二十一国立銀行の発起人は、その多くが生糸や縮緬、蚊帳、米、肥料な



どを扱う商人たちでした。

こうした背景には、滋賀県随一を誇った長浜の経済力があつたと考えられます。湖北地方は、江戸時代から養蚕が盛んで、そこで作られた生糸や縮緬などが長浜に集められました。繊維業のまちとして栄えた長浜の商人たちは、多くの財産を蓄えることができ、明治になるとその販路はさらに広がり、巨額の富を得た商人も現れました。

有力商人に支えられた第二十一国立銀行は、貸出金も他の銀行に比べて多額であるなど、開業当初から営業は順調でした。1878年（明治11年）には、東京第一国立銀行の頭取であつた渋沢栄一が長浜を訪れ、第二十一国立銀行の役員と懇談をおこなつたという記録が残っており、地方の銀行でありながら、明治政府に近い立場の経済人からも注目されていたことがうかがえます。

第二十一国立銀行の後、長浜では地元資本による長浜貯金銀行、長浜銀行が設立されました。また、第六十四国立銀行（大津市本店）長浜支店、第百三十銀行（大阪市本店）長浜支店も開業しました。これらの銀行が貸し出す豊富な資金は、長浜の商工業をいっそう盛んにしました。

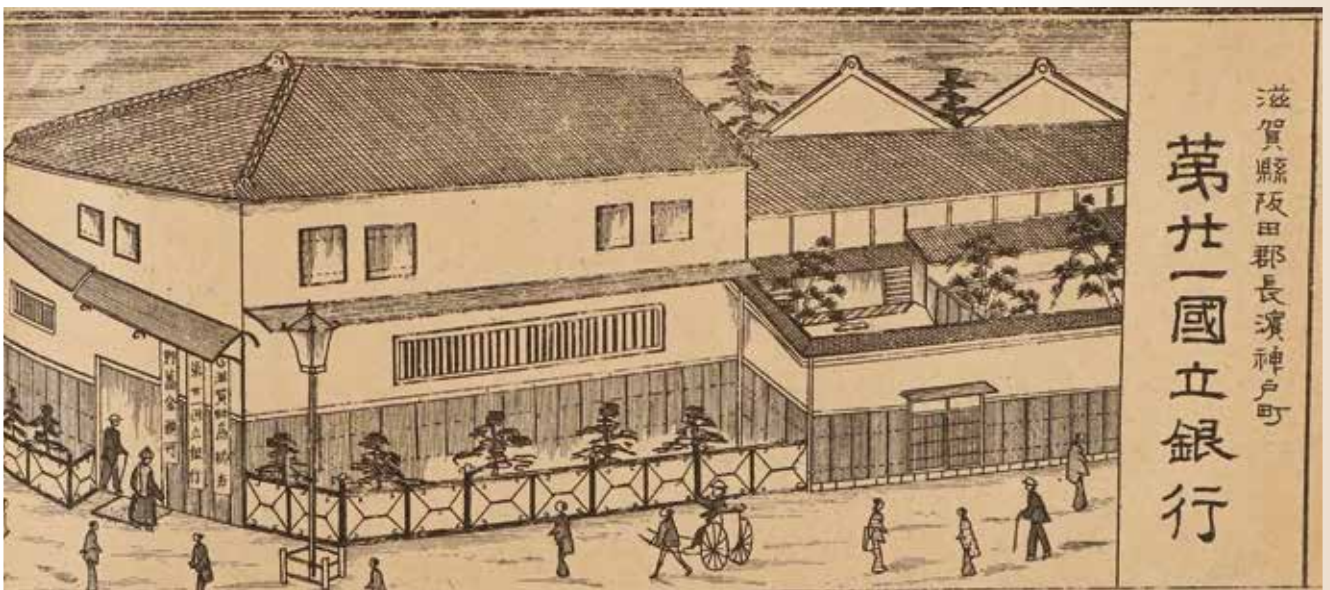
なお、第百三十国立銀行長浜支店は株式会社百三十銀行となつた後、1900年（明治33年）に建物を新築し、1906年（明治39年）に明治銀行長浜支店となりましたが、その後、個人やカトリック教会などとして使用され、現在は黒壁ガラス館となっています。

明治期の長浜では繊維業を中心とする経済発展により、さまざまな金融機関が設立され、近代化へあゆむ長浜を支えたのです。

その後、第二十一国立銀行は、1897年（明治30年）11月、営業満期となつたことから「株式会社二十一銀行」に転換しました。私立銀行となつた二十一銀行は、1929年（昭和4年）12月に江北銀行・伊香銀行と合併し、新たに「湖北銀行」として営業は引き継がれました。



第二十一国立銀行の株券（1878年）長浜城歴史博物館蔵



第二十一国立銀行（『近江国農商工便覧』より）



## 長浜の近代化を支えた産業



力織機を導入した縮緬工場の様子(大正時代)

明治政府は、「殖産興業」<sup>しよくさんこうぎょう</sup>をスローガンに産業の育成による近代化をめざし、西欧の先進技術を導入するため、官営模範工場の設立や専門的な技術をもった外国人の雇用などを積極的に進めました。特に紡績や織物の軽工業に力を入れ、1872年(明治5年)に富岡製糸場(群馬県富岡市)を創設しました。

長浜では、養蚕・製糸・縮緬・蚊帳などの江戸時代からの地場産業が政府の殖産政策などもあって盛んに行われるようになり、多くの有力な生糸商人を輩出することとなりました。彼らはすでに1858年(安政5年)の日米修好通商条約による開港をきっかけに、幕末から横浜での生糸貿易にかかわり、江戸や京都などに店を出していました。

そんな中、いち早く製糸会社を設立したのが柴田源七です。源七は、生糸の品質改良をはかり、1870年(明治3年)に製糸工場をつくり、1873年(明治6年)には広く滋賀県下から出資者を募って「長浜生糸改会所」<sup>しほたげんしち</sup>を設立しました(その後、生糸改会社の制度は廃止される)。

長浜に本格的な製糸会社「近江製糸株式会社」ができたのは、1887年(明治20年)のことです。



社長となった下郷傳平<sup>しもこうでんぺい</sup>のほか、長浜の有力商人たちがかわり、現在の長浜赤十字病院（長浜市宮前町）がある場所に設立され、1893年（明治26年）には従業員400人という大工場となりました。その後も生糸の生産・改良がはかられ、1914年（大正3年）に始まった第一次世界大戦の影響により解散するまでの約27年間、長浜の製糸工業発展のために尽くしました。

一方、織物業では、明治の初め頃、「浜ちりめん<sup>※</sup>」の粗製<sup>そせい</sup>乱造<sup>らんぞう</sup>（質の悪い安物を大量に作ること）が広がり、滋賀県は品質の向上を図るため、1885年（明治18年）に「織物業取締規則」を公布します。1886年（明治19年）には長浜大手町（現在の長浜市元浜町）に近江縮緬絹緞業組合と取締所が設立しました。取締所では徹底した品質管理が行われ、浜ちりめんの品質の保持が進められました。

さらに、これまで手織機<sup>ておりばた</sup>で行われていた浜ちりめんの生産において、力織機<sup>りきしよつき</sup>（機械動力式の織機）の使用が奨励されるようになり、1910年（明治43年）設立の近江浜縮緬製織合名会社（長浜市常喜町）や1912年（大正元年）設立の大塚商店工場（長浜市元浜町）など多くの縮緬工場が誕生しました。

また、ビロードは、明治期初めに綿ビロードが輸入されたことにより、大きな打撃を受けましたが、1905年（明治38年）に近江ヴェルベット合名会社（長浜市石田町）、1906年（明治39年）には天鷲絨製織合名会社<sup>ビロード</sup>（長浜市石田町）が設立されるなど、次第に好況を取り戻していきました。このように、明治から大正にかけて、長浜でも産業革命を迎えることとなり、経済の発展をもたらしました。

※浜ちりめん…長浜市を中心に生産される高級絹織物の総称



浜縮緬創製記念碑（長浜八幡宮境内）



## 引札にみる長浜のにぎわい

1882年(明治15年)3月10日、長浜－敦賀(金ヶ崎)間の鉄道開通(柳ヶ瀬トンネル部分のぞく)に合わせて、本格洋風建築の長浜駅が開業しました。駅舎は長浜港に隣接しており、湖上を行く蒸気船との連絡を密にできる機能を備えていました。

1884年(明治17年)には、長浜－敦賀間と長浜－大垣間の全線開通にともない、わが国最初の鉄道連絡船が営業を開始し、長浜駅は鉄道と汽船を結ぶ一大ターミナルとしての役割を担うこととなります。

当時、長浜－敦賀間には、3往復の旅客列車と、臨時便を含む3往復の貨物列車が設定され、大垣からも3往復の列車が長浜に乗り入れていました。また、琵琶湖では、これと連動するように長浜から大津への航路で3往復の蒸気船が運航していました。こうした交通網の発達によって、商業活動がさらに活発になり、さまざまな業種の商店が商売を競い合いました。

1871年(明治4年)に戸籍資料として作成された「元禄期・明治初期長浜町職業構成表」によると、長浜の主な「商」の職種として、米、めん類、酒、塩、油、醤油、魚、煙草、茶、菓子、砂糖、豆腐、肴(料理)、煮売、道具、荒物、小間物、瀬戸物、金物、古金物、紙、蝋燭、炭、葉、種、傘、木、綿、絹、ビロード、糸、蚊帳、古道具、古手(使い古した衣類・道具)、質、旅籠(旅行者を宿泊させる食事付きの旅館)、飛脚(手紙・金銭・小荷物などを運ぶ者)、船稼ぎ、荷問屋などが挙げられています(2000年発行『長浜市史 第4巻 市民の台頭』参照)。

こうした商いの賑わいぶりを、今に伝えるものの一つに「引札」があります。引札とは、江戸時代に新たに登場した広告用の刷り物のことで、現在の広告チラシのようなものです。引札の「引く」には、引きつける、配布するという意味があり、「広く配る札」、「客を引く札」、「福を引く札」として、年頭の挨拶や売り出し、開店・改装の披露などに広く用いられました。店や商品の宣伝が目的であることから、客の興味や関心を引きつける、工夫を凝らした宣伝文句や美しい図柄を特徴としており、明治以降は印刷技術の進歩にともなってその文化が一気に花開きました。特に1950年代から1960年代にかけては、鮮やかで斬新な図柄の「正月用引札」と呼ばれる引札が全国的に流行し、長浜でも多くの引札が配られました。

今も残る引札は、そのどれもが100年以上前に刷られたとは思えないほどに色鮮やかで、見る者を楽しませてくれます。中には今でも商売を続ける老舗店の名前を見ることができ、まさに明治における長浜のにぎわいを生き生きと伝える貴重な資料と言えるでしょう。

ここでは、「鉄道のまち・長浜」ならではの引札を紹介します。



和菓子屋 日の出軒引札



運送業 徳田運送店引札



運送業 中川利右衛門引札



運送業 両儀運送店引札



運送業 共同運搬會社引札



運送業 北川利平引札



運送業 吉田運送店引札



## 長浜の近代化遺産

日本は江戸時代の終わり頃から、欧米諸国の影響を受けながら、近代的な社会へと歩いていきました。近代化を今に伝える建造物などを「近代化遺産」といいます。

長浜には、明治時代から昭和中期にかけて西洋風を取り入れながら建てられた近代建築物が今も残っています。ここではその代表的なものを紹介します。





## 1 開知学校

長浜市元浜町



1874年（明治7年）に新築された開知学校の校舎（南舎）です。木造3階建、八角形の鼓楼（塔屋）が載った擬洋風建築。

1937年（昭和12年）に現在地へ移築。2000年（平成12年）、当初に近い姿に復原されました。現在は、店舗や会議室として活用されています。

◆登録有形文化財（建造物）

## 2 旧長浜駅舎

長浜市北船町



1882年（明治15年）、長浜—敦賀（金ヶ崎）間の鉄道開通（柳ヶ瀬トンネル部分を除く）と同時に完成しました。イギリス人技師の設計で建てられた本格的な西洋建築物。

現存する日本最古の駅舎であり、現在は「長浜鉄道スクエア」として公開されています。木骨構造の石灰コンクリート造2階建。第1号鉄道記念物。

◆滋賀県指定有形文化財



## 3

### けいうんかん 慶雲館

長浜市港町



1887年(明治20年)に明治天皇・皇后の行在所(休憩所)として、長浜の近代化に力を尽くした実業家の一人、浅見又蔵が私財を投じて建設しました。

木造2階建、寄棟造の書院風建築。本庭の池泉回遊式庭園(国指定名勝)は、名匠・7代目小川治兵衛(植治)が手がけたことで知られます。毎年1月~3月には、長浜盆梅展が開催されています。

## 4

### くろかべ かんほんかん 黒壁ガラス館本館 (旧第百三十銀行長浜支店)

長浜市元浜町



1900年(明治33年)に株式会社第百三十銀行長浜支店として建設されました。木造2階建、瓦葺き。伝統的な土蔵造を基調とし、要所に洋風の意匠を採り入れた建物です。

黒漆喰塗りの外観から「黒壁」の愛称を持ち、広く親しまれています。

◆登録有形文化財(建造物)



## 5 曾根東福寺組地蔵堂（旧曾根学校玄関）

長浜市曾根町



1876年（明治9年）に建てられた旧曾根学校の玄関です。木造平屋建、円弧状の瓦屋根を載せた珍しい建築物。

旧曾根学校は、1875年（明治8年）に開校、1886年（明治19年）に廃校となりました。現在は、地蔵堂の鞘堂（※）として使われています。

### ◆登録有形文化財（建造物）

※鞘堂…建物を風雨などから保護するため、外側から覆うように建てた堂

## 6 旧鍛冶屋郵便局

長浜市鍛冶屋町



1874年（明治7年）に酒造業を営む草野五左衛門が「郵便取扱所」として開設したのが始まりです。約90年間郵便局として使われました。木造2階建、寄棟造、瓦葺き。現在は物置として使用されています。

なおこのほかに、柳ヶ瀬（余呉町）、塩津（西浅井町）、杉野（木之本町）、川合（木之本町）、朝日（湖北町山本）の郵便局旧舎が残っています。

## 7

### こほくとしょかん 江北図書館

長浜市木之本町木之本



1937年（昭和12年）、伊香郡農会の庁舎として製糸工場跡地に建設されました。木造2階建（一部平屋）、瓦葺き。現在は、100年以上の歴史を持つ、公益財団法人江北図書館として使われています。

## 8

### こうゆうかん きのもと交遊館（旧湖北銀行木之本支店）

長浜市木之本町木之本



1935年（昭和10年）湖北銀行（のちの滋賀銀行）木之本支店として建設されました。北国街道ほっこくかいに東面して建つ鉄筋コンクリート造2階建。正面にイオニア式円柱4本の大オーダーを付けた重厚な造りが特徴です。2005年（平成17年）に改修され、現在は「きのもと交遊館」として地域のイベントや交流のために活用されています。

◆登録有形文化財（建造物）





## Ⅱ . 長浜の創業者たち



私たちの長浜には、豊かで美しく、かつ厳しさもある自然環境の中で育まれてきた、勤勉さや粘り強さ、古いものを大切にしながらも新しいものを進んで取り入れていこうとする“進取の気性”が息づいています。

明治以降の長浜は、こうした環境を背景にすぐれた実業家を多く輩出してきました。彼らはさまざまな分野で活躍し、長浜や日本のためにチャレンジしました。時に目の前に立ちはだかる問題に苦悩しながらも、夢や情熱を忘れず、自ら立てた志に向かって一生懸命に努力し、輝かしい業績を残しています。

現在の長浜の発展には、彼らをはじめとする多くの「人のちから」があります。

ここでは、産業、経済、教育、社会基盤など、ふるさと長浜の発展に力を尽くした先人たちを紹介します。





あさみ またぞう  
 長浜の近代化のため 多方面にわたり活躍 浅見 又蔵

1839年—1900年



浅見又蔵は、1839年（天保10年）8月16日、宮町（現在の長浜市大宮町）の薬種商・若森彦右衛門の三男として生まれました。幼名は寅吉といいます。

12歳の時、京都の呉服商で親戚筋にあたる土田家で商売の手ほどきを受け、6年間の修行のあと、故郷に戻りました。土田家ではその才能を見込まれて、跡継ぎになることを望まれたそうです。

1860年（万延元年）22歳の時に神戸町（現在の長浜市元浜町）の浅見又之助の養子となり、名を又之助と改めました。浅見家を継いだ又蔵は、家業の縮緬製造に励みます。「浜ちりめん」のすばらしさを世界の人々に知ってもらおうと考え、1876年（明治9年）にアメリカ・フィラデルフィアで開催された万国博覧会に出品します。品質の良い浜ちりめんは、海外の

人々にも好評で、これを機に、商人仲間の柴田源七らとアメリカ・ニューヨークへの輸出をおこないました。これが浜ちりめんの最初の海外輸出となり、浜ちりめんの名は一躍有名になりました。

又蔵は、家業のかたわら長浜の町を発展させることにも力を入れ、町役や市街総代役、総戸長などを務め、地域づくりに励みました。1871年（明治4年）、又蔵の提唱によって滋賀県で初めての小学校（「第一小学校」と命名）が創設されました。全国的には、1872年（明治5年）に公布された新しい教育制度「<sup>がくせい</sup>学制」をきっかけに多くの学校が造られましたが、長浜ではその1年も前に子どもたちの教育環境が整っていたことは画期的といえるでしょう。2年後の1874年（明治7年）には洋風のモダンな校舎が新築され、「<sup>かいち</sup>開知学校」と改称されました。このとき又蔵は総戸長として、中心的な役割を果たしています。

また、1877年（明治10年）には、「第二十一国立銀行」の創設にも発起人の一人としてかわり、仲間とともにその開業に東奔西走しました。その甲斐あって、同年12月15日に全国で21番目、滋賀県で最初の国立銀行として開業することができました。開業当初は又蔵は取締役の立場でしたが、1881年（明治14年）には周囲から推薦されて<sup>とうどり</sup>頭取（銀行の代表者）に就任しています。

同じ頃、大津に設立された第六十四国立銀行が経営危機に陥り、その立て直しに尽力した又蔵

## II. 長浜の創業者たち

は、1886年（明治19年）に同行の頭取にも推挙されました。さらに、滋賀県令（当時の県知事）の要請で滋賀県農工銀行の委員に加わり、重役として経営に携わるなど、長浜だけではなく県の経済界にも大きな功績を残したのです。

そのほかに運輸事業にも関与しました。1879年（明治12年）、米原（滋賀県）－敦賀（福井県）間の鉄道敷設が政府で決定されたことを知ると、長浜の有力者たちとともに、長浜－関ヶ原間の私設鉄道の建設許可を願い出しました。同時に水陸交通の連絡輸送がスムーズに行えるよう、長浜港の改修にも乗り出しました。又蔵は、長浜の繁栄のためには、鉄道や湖上交通が重要であると考え、この二つを組み合わせることにより、長浜と京阪神、北陸、東海を結ぼうと考えたのです。

やがて1882年（明治15年）3月10日、敦賀－長浜間の鉄道が、未完成の柳ヶ瀬トンネル部分を除く前後の区間が開通し、同時に長浜の湖岸に長浜駅が開業しました。その翌年には又蔵が提案していた長浜－関ヶ原間の鉄道も開通し、又蔵が考えていたように、長浜は鉄道と鉄道連絡船のまちとして大いににぎわいました。

1887年（明治20年）、明治天皇と皇后の行幸啓（天皇と皇后と一緒に外出されること）を知った又蔵は、巨額の私財を投じて長浜港近くに行在所（休憩所）を建設しました。これが現在の「慶雲館」です。同年2月21日の朝、京都御所を出発した天皇と皇后は、大津まで鉄道を利用し、大津からは当時又蔵が頭取をつとめていた太湖汽船会社の所有船・第二太湖丸に乗船し、午後1時に長浜へ到着しました。そして慶雲館で休息をとった後、東京へ戻りました。

その後、慶雲館は、1936年（昭和11年）に浅見家から当時の長浜町に寄贈され、現在は早春の風物詩「長浜盆梅展」の会場となっています。



慶雲館「行幸二十五年 慶雲館建碑式記念写真帖」より



浅見又蔵の胸像（長浜小学校）

実業家としての鋭い感覚や広い視野、そして先見の明をもって、ふるさと長浜の発展のため多方面にわたり活躍した又蔵でしたが、病に倒れ、1900年（明治33年）4月21日に62歳でこの世を去りました。



あんどう よそじろう  
安藤 與惣次郎

安藤家と中合百貨店

生没年不詳

福島県福島市に長浜の商人・安藤與惣次郎が興した「中合百貨店」があります。

その創業は1830年（天保元年）に遡り、初代の中村治郎兵衛が東北地方で商いを始めました。安藤與惣次郎はその3代目にあたります。

初代の中村治郎兵衛は、近江国神崎郡南五個荘村石馬寺（現在の東近江市五個荘石馬寺町）出身の近江商人で、天保のころから東北地方での行商活動を行うようになりました。天秤棒をかついでの得意先開拓に血のにじむような努力をした結果、山形県の米沢、福島県の若松と二本松方面を商圏として基盤を固めました。

明治時代の中頃、店を会社組織にして「中村合名会社」としましたが、世間では中村の「中」の字と合名会社（※）の「合」の字をとって中合と呼んでいたため、中村合名会社が1935年（昭和10年）に株式会社となった際にそれまでの社名を「中合」と改めました。この頃が3代目となる安藤與惣次郎の代で、彼は長浜の安藤家から養子に入りました。それ以前にも中村家から安藤家への縁組みがあるなど、両家は強い絆で結ばれていたといえます。

與惣次郎の子・安藤順三は中合の四代目です。

安藤與惣次郎の先祖は、豊臣秀吉が長浜城主であった時代の長浜の有力者「十人衆」の一人、安藤九郎右衛門です。秀吉は、長浜の城下町49町を10組に分け、各組に一人ずつ町年寄を置いたといわれ、安藤九郎右衛門はその一人として町政にたずさわりました。

現在も北国街道沿いには、1905年（明治38年）に建てられた安藤家の屋敷が残っており、内部



日本庭園「古翠園」



安藤家外観

が一般公開されています。長浜を代表する近代和風建築で、屋敷内には陶芸家・北大路魯山人が長浜に滞在した際に内装を手がけた離れ座敷「小蘭亭」や篆刻看板、また、庭師・布施宇吉（植宇）による風情ある日本庭園「古翠園」を見ることができます。

※合名会社…2人以上の社員からなり、社員（出資者）は会社の債務に対し無制限に責任を負う「無限責任社員」だけで構成される。

## II. 長浜の創業者たち

# 大塚産業グループの 創業者 おおつか 大塚 きちべえ 吉平 (吉兵衛)

生没年不詳

大塚吉平は、江戸時代後期の商人で、現在の大塚産業グループの創業者です。

江戸から明治、大正、昭和当時の長浜は、織物や生糸の製造が主要産業の一つで、浜ちりめんや浜糸は全国にとどまらず、海外にも販路を<sup>はんろ</sup>広げていました。そのほか、蚊帳<sup>かや</sup>（※）も長浜の特産品として早くから広く販売されており、長浜産の蚊帳は「<sup>はまがや</sup>浜蚊帳」と呼ばれ、全国の市場を独占するほどの目覚ましい発展を遂げました。

この蚊帳の生産技術を長浜に持ち込んだ人物の一人が大塚吉平です。吉平は、自身の出身地であった坂田郡<sup>ほだ</sup>保多村（現在の長浜市保多町）を屋号として「<sup>ほだや</sup>保多屋」と名乗りました。その後、浜蚊帳の需要は高まり、保多屋吉平（吉兵衛）は彦根藩の庇護のもと、寛政年間（1789～1801）には、木綿屋市郎兵衛、俵屋甚平、坂本屋文四郎とともに、株仲間をつくり、そのすべてを取り仕切りました。これにより、浜蚊帳の生産と販売は、めざましい成長をとげたのです。

この蚊帳問屋が現在の大塚産業グループで、その創業は1706年（宝永3年）といわれています。吉平は、蚊帳のほか、浜ちりめんやピロードなどの特産品も扱っていましたが、長浜周辺の農民に<sup>しよつき</sup>織機の貸し出しをおこなって<sup>あっせん</sup>機織りの内職を斡旋し、地域振興に大きな貢献を果たしました。

吉平が手がけたこれらの事業は次代に引き継がれていきます。明治に入り生産体制は近代工場化され、ちりめん、蚊帳ともにそれぞれ国内トップメーカーとしての地歩を固め、現在の大塚産業グループの礎となりました。

※蚊帳…夏に蚊やその他の小虫を防ぐため寝室などにつるして用いる。麻・木綿などの目のあらい布で作る。



大塚吉平が創業した大塚産業グループの敷地内にある食堂  
(もとは開知学校北校舎)



おおつか とくたろう おおつか せいじろう  
**大塚 篤太郎・大塚 誠次郎**

1913年—1964年

1915年—1995年

大塚篤太郎、誠次郎兄弟の祖先は、長浜商人の初代大塚吉平（おおつかきちへい）（大塚産業グループの創業者）で、江戸時代の寛文年間（1661～1673）に八幡蚊帳（はちまんがや）の製法を長浜に持ち込み、浜蚊帳（はまがや）として売り出し大きな評判を得ました。吉平は、自身の出身地であった坂田郡保多村（現在の長浜市保多町）にちなんで商店の屋号を「保多屋（ほだや）」と称しました。

その後、江戸時代後期に、篤太郎・誠次郎兄弟の祖父、大塚善次郎（ぜんじろう）が保多屋から蚊帳業を引き継ぎ分家します。その後、兄弟の父・源治（げんじ）は、「大塚蚊帳工場」の名称で経営を行っていましたが、1923年（大正12年）に電気動力による機械を導入し、蚊帳の大量生産に踏み切ります。しかし、その4年後の1927年（昭和2年）に病のため亡くなりました。このとき、篤太郎14歳、誠次郎12歳でした。

1935年（昭和10年）、二人は大塚蚊帳工場の経営に参加し、経営の近代化を目指して、組織を法人化し「大塚蚊帳株式会社」と名乗ります。篤太郎が社長、誠次郎が専務でした。以後、兄弟力を合わせ、羊毛の代用となる繊維の開発や、真綿（まわた）の機械的生産、飛行機ハンドルの製造など、次々と新しい事業に挑戦し、1944年（昭和19年）には、商号を大塚産業株式会社と改めました。

1964年（昭和39年）、篤太郎が病死。その後を弟の誠次郎が継いで社長に就任します。誠次郎は、移りゆく時の流れと社会のニーズを考え、蚊帳製造部門からの撤退を断行、それ以降は自動車産業や住宅産業へと参入し、会社は新しい近代製造業へとシフトチェンジしていきました。

財界や政界にも顔が広がった誠次郎は、湖北の人々の利便性のため、JR北陸線の直流化（※）とダイヤの増便について、しばしば進言を行っていたといえます。彼のそうした働きもあり、1991年（平成3年）9月14日、湖北の人々が待ち望んでいた直流化が実現、大阪発の新快速電車が初めて長浜駅に到着しました。また、人との縁や絆を大切にしていたという誠次郎の陰の努力によって、1988年（昭和63年）にオープンした長浜楽市の誘致が実現しました。

誠次郎は、1995年（平成7年）5月13日にこの世を去っていますが、長浜における最後の近江商人と言えるかもしれません。

※直流化…日本の電車の電源には路線により直流と交流があり、かつては米原以南が直流、以北が交流であったため、車両を入れ替える必要があった。これが1991年の北陸本線の直流化により、京阪神から来る直流電車が直接長浜駅に乗り入れるようになった。（76・77ページ参照）

# 白木屋百貨店の創業者 おおむら ひこたろう 大村 彦太郎

1636年-1689年

大村彦太郎は、1636年（寛永13年）に浅井郡五村（現在の長浜市五村）に生まれました。五村には名前に「彦」の字がつく大村五家があり、彦太郎の出自の一つと考えられます。

幼くして父母が亡くなったため、彦太郎は母の里である長浜の河崎家で育てられました。養育先の河崎家は、江戸時代初期から材木商を営む家でした。

幼少の頃から近所の良疇寺<sup>りょうちゅうじ</sup>で学び、仏道や学問に励んだ彦太郎は、やがて河崎家から認められ、17歳で京都に出店、1662年（寛文2年）27歳の時には、江戸日本橋二丁目に小間物商「白木屋」<sup>こまものしょう しろきや</sup>を開店しました。江戸への出店に際しては、河崎家から銀20貫、学び舎の師・良疇寺の法山和尚からは、小さな観音像が贈られました。信心深い彦太郎は、江戸に出て商いをする際には、和尚から贈られたこの観音像を首からかけて歩いたと言います。

彼の小間物屋は成長を続け、「商いは高利<sup>こうり</sup>をとらず、正直に良きものを売れ、末は繁盛」を信条に、やがて白木屋呉服店に発展し、天明年間（1781~1789）には190人ももの店員を抱えるほどに成長しました。白木屋は越後屋<sup>えちごや</sup>（現在の三越百貨店の前身）や大丸屋<sup>だいまるや</sup>（現在の丸の内百貨店の前身）と並んで江戸の三大呉服店の一つとして知られました。

1689年（元禄2年）53歳で生涯を閉じた彦太郎ですが、彼の没後数年経った資料に、江戸・本町通りの大呉服店のひとつに「白木屋彦太郎」の名があり、繁盛していたことを示しています。子孫は代々彦太郎を襲名しました。

明治に入ると白木屋百貨店となり、1956年（昭和31年）には東京急行電鉄（東急）グループに入り、東急百貨店日本橋店となります。高度成長やバブル経済に乗って業績を拡大していきますが、1991年（平成3年）1月、多くの人々に惜しまれながら閉店しました。

大村彦太郎は、小間物屋から百貨店まで成長した白木屋の基礎を築いた、長浜を代表する近江商人といえるでしょう。彼の近江商人魂は、白木屋336年の歴史が終焉<sup>しゅうえん</sup>するまで、代々受け継がれました。



幼少期の彦太郎が学んだ良疇寺（下坂浜町）



押谷産業株式会社初代社長

おしたに そうすけ  
押谷 惣助

1891年—1952年



押谷惣助は、大阪府大阪市福島区にある押谷産業株式会社の初代社長です。

惣助は、1891年（明治24年）、東浅井郡浅井町野瀬村（現在の長浜市野瀬町）に生まれました。幼少のころは家が極貧で生活が苦しく、小学校にも満足に通うことができませんでした。その後、大阪で土木工事の作業員になりますが、やがて電車の時代がやってくることを確信した彼は、市電の車掌になりました。

車掌となってからは、電車備品の納品の仕事をするを次の目標にしました。そのために電車の窓ガラスを製造するガラス屋に見習いに入りました。人あたりのよい惣助は、さまざまな技術を習得し、22歳のころ、電車備品の中でも、吊輪つりわとフェルトパッキングの需要が高いことを知り、新商品の開発に乗り出します。

そして1917年（大正6年）に独立し、押谷工業をスタートさせます。鉄道車両用品と造船用各種用品の製造販売を行い、あわせて吊輪とフェルトパッキングの加工品を主力商品として売り出しました。彼の予想どおり、主力商品の需要は高く、会社は軌道に乗り、東京支店の開設、事業内容の大型化など順調に成長していきました。

惣助は、郷土の出身者を取り立て、身内の者を経営に参加させるなど地縁・血縁を大切にしていました。常に笑顔の明るい人柄で、部下たちからは「大将」と呼び親しまれ、同郷の後輩たちにもたくさんの助言をおこないました。後輩や社員を育て発展させる親分のような包容力と、口よりも体で教える実践的なリーダーぶりが、とても魅力的な人物だったそうです。

# 無駄のない「のこぎり商い」<sup>かわしま まごいちろう</sup> 川島 孫一郎

生没年不詳

浅井郡野瀬村（現在の長浜市野瀬町）は、伊吹山系の草野川上流にあり、天吉寺山てんきちじやまの麓で田地が少なく、薪炭業しんたんの片手間に多くは養蚕ようさんと生糸、もぐさの生産など、古くから商人の村として栄えました。

野瀬の商人たちは、自家製品である生糸を西陣や丹波（京都府）、越前（福井県）へ売り、地元で製造した伊吹もぐさを全国へ売り歩いたほか、美濃（岐阜県）で仕入れた和紙を県内外へ行商し、帰りは伊勢（三重県）や若狭（福井県）から海産物、乾物などを仕入れるなど、無駄のない「のこぎり商いあきな（のこぎりは、押すと引くとの両方で物を切るところから、行きも帰りも商売をして利を得ること）」を年中繰り返しました。

白木屋京都店の総支配人をつとめた川島孫一郎かわしままごいちろうも、野瀬出身の商人です。白木屋は1653年（承応2年）、長浜の大村彦太郎おおむらひこたろうが京都で開店した呉服商で、やがて1662年（寛文2年）には江戸日本橋へ進出し、とても繁盛しました（28ページ参照）。白木屋京都店では、主に呉服の仕入れに力を入れていたことから、孫一郎はここで仕入れのノウハウを学びました。

川島家は、元庄屋で、代々孫一郎または孫庄司を名乗り、先祖は養蚕と生糸製造なりわいを生業としていました。江戸時代中頃から呉服を商うようになり、関東の桐生きりゅう（群馬県）、足利あしがが（栃木県）、八王子（東京都）などの絹織物産地へ足をのばして呉服を仕入れました。

まだ、汽車のない時代に、手甲てっこう、脚絆姿きゃはんで各地を歩いたといえます。このように、全国に行商に出かけた野瀬商人は、湖北地域における近江商人の草分けというべきかもしれません。

なお、孫一郎から数えて7代後の吉村孫三郎よしむらまごさぶろうは、京都で吉村紡績株式会社ほうせき（現在のヨシボー株式会社）を興し、関西財界で活躍しました（44ページ参照）。



川島孫一郎のふるさと野瀬の集落



こぼり りんえい  
ヤマダホームズ創業者 小堀 林衛

1912年—1989年



小堀林衛は、日本を代表する住宅メーカー・小堀住研株式会社（現在の株式会社ヤマダホームズ）の創業者です。林衛は、1912年（大正元年）に東浅井郡上草野村野瀬（現在の長浜市野瀬町）に生まれ、上草野小学校高等科を卒業後、大阪の石けん工場でっちぼうこうで丁稚奉公として働きました。ここで2年間勤めた後、1928年（昭和3年）竹中工務店に入社します。

戦時中は、出張所があった中国・満州まんしゅうへ渡り、集合住宅や関東軍の格納庫建設など重要な工事を手がけました。日本敗戦後に帰国した林衛は、米軍が衛生的な野菜の確保を目的に建設した大津の農園工事を手がけ、1948年（昭和23年）に起こった福井大震災の際には、福井地方担当の主任に登用されるなど、社内でもその実力を認められた存在でした。

しかし、会社の方針に対する考えの違いから、37歳の時に退社します。おい なかしましろうご甥の中島昭午を誘い、タクシー業や運送業を起こし、1951年（昭和26年）に長浜出身の戦国武将・石田三成いしだみつなりの名前をつけた「三成建築工業株式会社」を始めました。

三成建築は、建材メーカーとして業績をあげましたが、林衛はこれまでの経験を活かして建築業界へ進出し、1955年（昭和30年）に小堀興業株式会社（のちに小堀住研株式会社）に社名を変更しました。林衛が始めた小堀興業は、高度経済成長の波に乗り、日本各地で住宅を建築し、一躍日本のトップ企業に躍り出ました。

林衛にとっての建築は、技術開発と研究で住みやすさを追求する「研築」けんちくであったと言われています。その後、小堀住研株式会社に名を変えた同社は、林衛に代わって社長に就任した中島昭午のもと、1990年（平成2年）にエス・バイ・エル株式会社に再び社名を変更し、林衛の精神を受け継ぎながら大手住宅メーカーとして躍進しました。

その後、エス・バイ・エルは、2011年（平成23年）に株式会社ヤマダ電機と資本・業務提携を行い、2015年（平成27年）ヤマダ・エスバイエルホームに改称、現在は株式会社ヤマダホームズとして高性能注文住宅などを手がけています。

### 滋賀県初の銀行の初代頭取

しばた げんしち  
**柴田 源七**

1835年-1899年

柴田家は元禄時代から続く商家で、当主は代々「源七」を名乗っています。9代目柴田源七は、1835年（天保6年）、当時の坂田郡六荘村室<sup>むろ</sup>（現在の長浜市室町）に生まれ、江戸時代後期から明治時代前期にかけて活躍した商人です。

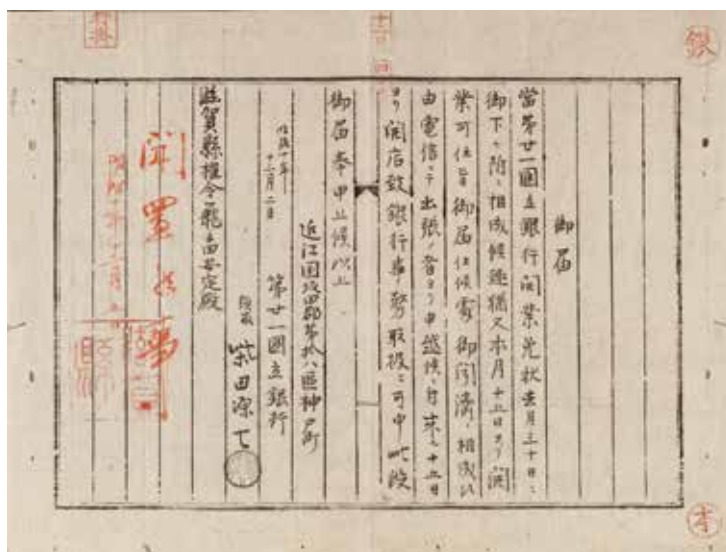
源七は幼い頃から江戸に出て、長浜の地場産業であるちりめんやビロード、生糸などを扱って商売をおこなっていました。1858年（安政5年）に日米通商修好条約が結ばれると、開港した横浜でいち早く生糸貿易を行い、明治時代に入ると輸出向けに品質向上のため自ら製糸工場をつくり会社を設立しました。1873年（明治6年）に源七が建設したこの会社の建物は、小学校として建築された開知学校<sup>かいち</sup>（長浜市元浜町）よりも早い長浜最古の洋風建築とされています。

1876年（明治9年）に全国で国立銀行が設立され始めると、源七は商人仲間たちと翌1877年（明治10年）に滋賀県で初めてで、全国でも21番目となる「第二十一国立銀行」を設立し、その頭取<sup>とうどり</sup>となりました。また、1879年（明治12年）に始まった第1回滋賀県会（現在の県議会）には、議員として選出されています。

初めて尽くしの源七でしたが、49歳となった1883年（明治16年）に財界から引退します。以後は俳句の道にいそしみ、九起堂九峰と名乗ります。源七が句会を開くと、彼を慕って指導を願う人たちが多かったそうです。

商人としても文化人としても優れた源七は、1899年（明治32年）に65歳で亡くなりました。業をおこして財をなしましたが、自らは質素儉約で、公共のためにその財を用いたといえます。

室町にあった彼の邸宅は惜しくも失われましたが、現在も東京・日本橋にある絹織物問屋・株式会社マルシバ（旧丸太柴田商店）が源七の事業を私たちに伝えます。



柴田源七がかかわった第二十一国立銀行の届出書  
（「頭取 柴田源七」の名前が書かれている）  
長浜城歴史博物館蔵



しもごうでんべいひさみち

しもごうでんべいひさなり

## 下郷傳平久道・下郷傳平久成

1842年-1898年

1872年-1946年



長浜有数の豪商として知られた下郷家では、代々「下郷傳平」を名乗っています。

初代下郷傳平久道は、江戸時代の1842年（天保13年）に、長浜市街地の南新町（現在の長浜市朝日町）に生まれました。餅屋から身を起こし、幕末の18歳の頃から京都や大坂に出て骨董品の商いに携わっていましたが、途中から米穀商も始めます。

明治になると、米穀商に専念し米穀売買所を長浜に創設しました。さらに、肥料商を兼ね大津市に支店も出しています。1883年（明治16年）には大阪製紙所を買収して下郷製紙所を創設し、1887年（明治20年）には長浜に近江製糸株式会社を設立するなど、その業務を拡大していきました。現在、近江製糸株式会社の跡地は、長浜赤十字病院が建てられていますが、かつての歴史を示すプレートが設置されています。

久道は実業界のみならず、貴族院議員として中央政界で活躍したほか、日本赤十字社の滋賀県支部幹事を務めるなど、社会事業にも貢献しました。晩年は、図書館、博物館、施薬院（庶民病院）などの設立を計画しましたが、夢を果たすことなく、1898年（明治31年）に亡くなりました。

この久道の夢と傳平の名を引き継いだのが、1872年（明治5年）に生まれた長男・久成でした。父が創業した近江製糸株式会社の社長となったのは、実に25歳という若さでした。その後久成は、会社経営が安定するなかで、20以上の会社を設立していきます。多忙なかたわら、長浜町議会議員や長浜町長にも選出され、父と同様に貴族院議員にもなっています。また、多くの公共事業にも携わっていますが、その中でも特筆すべきは、1903年（明治36年）に財団法人下郷共済会を設立したことでしょう。

## II. 長浜の創業者たち

下郷共済会では地方功労者の表彰や戦没者追悼などの社会事業も行ないましたが、1915年（大正4年）には長浜の西本町（現在の長浜市元浜町）に文庫（図書館）を建設しました。これは、長浜ではじめての図書館でした。その蔵書は2万冊を超え、戦前から戦後における長浜の若者たちの学習の場となりました。

また、1918年（大正7年）には、現在の長浜幼稚園の場所に、「長陽園<sup>ちやうようえん</sup>」という運動場を開かれています。長陽園にあった東屋<sup>あずまぐ</sup>（柱と屋根だけの小さな建物）は移設され、現在も豊公園<sup>ほうこうえん</sup>に建てられています。そのほかにも、長浜の故事来歴・史跡・名勝・施設を紹介した冊子『長浜案内』を発行しました。また、発刊には至りませんでした。『近江長濱町志<sup>なごはまちょうし</sup>』の編さんも続けていました。

さらに、伊吹山にある高層気象観測所は、1918年（大正7年）、久成の寄付によって設置されたものです。

1921年（大正10年）、「鍾秀館<sup>しょうしゅうかん</sup>」という博物館を文庫の西側に創設しました。鉄筋コンクリート3階建ての、窓にはシャッターを備えた本格的な博物館施設でした。鍾秀館には、全国から収集された美術・考古資料や、地域の歴史資料が陳列され、当時の長浜の文化に大きく寄与しています。現在、「えきまちテラス長浜」の東側にあるコンビニエンス・ストアがその跡地で、西北隅にガラス製の記念プレートが設置されています。

このように下郷傳平久道・久成父子は実業家でありながら、その資金を使って長浜の社会・文化事業を行なったところに、偉大な業績があると言うべきでしょう。下郷共済会は、現在も一般財団法人として、長浜の文化に貢献しています。



鍾秀館の外観（一般財団法人 下郷共済会提供）



下郷共済会の博物館・鍾秀館内部（一般財団法人 下郷共済会提供）



富田酒造

とみた はちろうちゅうめい  
富田 八郎忠明

1876年—1947年



富田家の先祖は北近江を治めていた近江源氏佐々木京極氏です。下剋上で浅井氏が台頭したことにより、伊香郡木之本村（現在の長浜市木之本町木之本）に移り住み、富田姓を名乗りました。

富田八郎忠明は、1876年（明治9年）に坂田郡伊吹村上野（現在の米原市上野）の松島家に生まれ、幼児期に富田八郎忠利の養子となりました。

富田家では、代々「富田八郎」を名乗っており、父・忠利は、伊香郡初の小学校設立や伊香相救社の設立、木之本融通会社（のちの江北銀行）の設立、木之本製糸株式会社の設立にかかわるなど、教育・社会福祉・産業などの幅広い分野で地域の発展に尽くしました。

忠明は、東京専門学校（現在の早稲田大学）に学び、父の跡を継いで酒造業を引継ぎます。彼は清酒の品質向上をはかり、灘や伏見の清酒と肩を並べる製品づくりを目指して、学理を応用し経験と研究

を積みました。地酒「七本槍」は品質優良で評価も高く、宮内省（現在の宮内庁）の御用品にもなるなど、今も滋賀の銘酒の一つとして、日本酒ファンに愛されています。地元で酒造組合を造った忠明は、郊外に醸造試験場を設立し、さらなる品質向上の研究を進めるなど、醸造界に大きく貢献しました。

忠明は、醸造以外にもさまざまな分野で地域貢献を行っています。その一つに伊香病院（現在の湖北病院）の設立があります。また、教育の面では、木之本実科女学校の設立や伊香農学校の県立への移管、奨学金制度の確立など、人材育成に寄与しました。

さらに、琵琶湖周遊道路として、最後まで手つかずの状態であった木之本—海津間（約25km）の道路建設運動に携わり、道路開通を実現させました。忠明が最も力を入れたのは、木之本—関ヶ原—伊勢を結ぶ勢江鉄道の建設事業です。これは、滋賀県だけではなく、周辺県の交通と経済の発展向上をめざしたもので、1919年（大正8年）には勢江鉄道期成同盟の会長に推され、事業の実現に最善を尽くしましたが、残念ながら計画は中止となりました。

父・忠利と同様、木之本町長や衆議院議員、愛郷会会長、木之本製糸会長などを歴任し、ふるさとのために力を尽くしました。忠明は、1947年（昭和22）年11月29日に亡くなりますが、彼の死を悼んだ地域住民は、伊香郡葬の儀をもって、その冥福を祈ったということです。

# 江戸時代から明治時代にかけて活躍した生糸商人 中辻 源太郎

1846年—1924年

中辻源太郎は、江戸時代から明治時代にかけて活躍した生糸商人です。1846年（弘化3年）5月25日に長浜市田村町で生糸商を営む家系に生まれました。幼名は源治郎です。

弟の太郎次とともに家業を継ぎ、主に全国の達磨糸を集め、福井や京都の機業地へと売り歩きました。近江の達磨糸は、良質な繭から手引きした絹糸で、主に唐織（※）に用いられていたようで、錦織（※）用の糸と比較すると太く光沢がありました。東海道線の開通を機に、横浜を拠点として近江産の達磨糸の販売で成果をあげるようになりました。国内向けの商品については福井と京都で販売し、海外向けの輸出については、横浜商館で販売していました。

1902年（明治35年）、横浜市の生糸輸出商の倉庫が火災に遭った際、焼け残った生糸1,000箱をめぐる関係者の間で紛争が起こりますが、源太郎は、自社の損得よりも、同業者の利益を図ることを優先し、円満に解決しています。その後、1904年（明治37年）頃から、達磨糸が注目を浴び、海外から多くの注文が入るようになります。横浜港で「江州達磨糸」を求める声が多くなったのもこの頃のことです。これは、源太郎の努力の結果とも言えるでしょう。

家業も隆盛を極め、1903年（明治36年）には地元長浜の田村町湖岸の葭原を、私費を投じて開墾しました。地域の人々の協力もあり、4ヘクタール（40反）の美田（よく肥えた田地）に生まれ変わりましたが、これを自分だけのものとはせず、この土地をもとに田村の寺社の維持運営ができるように寄進したのです。

源太郎は、1924年（大正13年）に78歳で亡くなりました。地元の人々は、彼の遺徳を後世へと伝えるために1943年（昭和18年）に頌徳碑（偉人や先覚者などの徳をほめたたえる文章を刻んだ碑のこと）を建て、碑前で法要を行っています。現在、この碑は、長浜バイオ大学ドーム（県立長浜ドーム）の近くに移設され、定期的に地元の人々によって法要が行われています。

※唐織…中国渡来の織物、またはそれをまねて織った織物。金襴、緞子、朱珍など。

※錦織…金銀糸や種々の色糸を用いて、華麗な文様を織り出した織物。京都の西陣織など。



中辻源太郎頌徳碑



## 湖北地域における 経済界の重鎮

なかむら とらきち  
**中村 寅吉**

1873年—1945年

中村寅吉は、1873年（明治6年）、長浜町下船町（現在の長浜市朝日町）に生まれました。生家である「今津屋」は、生糸を扱う彦根藩の御用商で、寅吉は「今津屋」の12代目でした。

寅吉の祖父である10代目<sup>やじゅうろう</sup>弥十郎は豪商として活躍し、横浜を本拠として西洋各国とも貿易を始めています。

父の11代目<sup>やじゅうろう</sup>弥重郎は、1877年（明治10年）に、商人仲間と一緒に滋賀県初の国立銀行である「第二十一国立銀行」を設立し、初代支配人として、明治前期の長浜の経済界を支えました。

豪商の家に生まれた寅吉は、幼いころから優秀であると評判で11歳で戸主を相続、13歳のときに同年代の友人である<sup>にしだいちたろう</sup>西田市太郎（<sup>てんこう</sup>天香）、<sup>しもこうでんべい</sup>下郷傳平とともに「三福友」という会をつくり、以後3人は交遊を深めていきます。寅吉は、1896年（明治29年）、東京帝国大学（現在の東京大学）に入学し、卒業後の1903年（明治36年）には、第二十一国立銀行が組織替えをした株式会社二十一銀行の専務取締役就任しました。

その後、長浜貯金銀行取締役、日本銀行長浜金庫副代理人をつとめ、41歳で二十一銀行の<sup>とうどり</sup>頭取に就任します。その後も湖北銀行専務取締役、近江信託株式会社監査役、滋賀貯蓄銀行取締役、滋賀銀行取締役などをつとめ、明治、大正から昭和の前半にかけて、長浜はもちろん、湖北地域における経済界の重鎮として活躍しました。

さらに、1907年（明治40年）と1925年（大正14年）には、長浜町会議員にも選出されています。

寅吉は、1945年（昭和20年）8月9日に73歳で亡くなるまで、地域のために力を尽くしました。



「三福友」向かって右から中村寅吉、西田天香、下郷傳平久成  
（『長浜市史4 市民の台頭』から転載）

# 思想家・実践家 西田 天香

1872年-1968年



西田天香は、1872年（明治5年）に長浜片町（現在の長浜市大宮町）に、料理屋の子として生まれました。長浜曳山祭の子ども役者をつとめ、入学した開知学校では、たびたび成績優秀で表彰されています。

成人した21歳の1892年（明治25年）からは、長浜の商人・河路重平の委嘱を受けて、北海道の開拓事業に乗り出し、翌年には第1回移民とともに、岩見沢の南10キロの地にある清真布（現在の岩見沢市栗沢町必成）に入植しています。

また、河路が創設した開拓会社・必成社の社員として、清真布駅（現在の栗沢駅）の開設や、現在の栗沢町市街地の形成に力を尽くしました。今も現地にある栗沢神社は、長濱八幡宮の分霊を祀っており、浄土真宗清真寺の境内には木之本地蔵尊を祀る小さな祠が残っています。

天香は、夜学校を創設したほか、1896年（明治29年）には、北海道亜麻製線株式会社を設立しましたが、労働者と資本家の間に挟まれて苦勞が絶えず、1899年（明治32年）に退社を余儀なくされます。

その後、北海道内や京都市内などをめぐり歩きますが、1904年（明治37年）に長浜で「大悟（深く大きな悟りをひらくこと）」し「新生活」に入ったと言われます。ここでの「大悟」は一般には、長濱八幡宮の境内にあった本地堂（愛染堂、現在の舎那院本堂）で、3日3晩の参籠（ある期間こもって祈願すること）の後、4日目の朝に赤ん坊の泣き声を聞いて、「何の見返りのない母親の子どもへの愛」を悟り、「与えてこそ与えられる」、「捨ててこそ生かされる」という「無一物中無尽蔵」の境地にいたったと説明されています。しかし、最近の研究では、長浜での「大悟」は、その悟りの瞬間を象徴的に描いたに過ぎず、実際には京都の友人から借りた、ロシア文学の大家・トルストイの『我宗教』に感銘した時だったと考えられています。

その後、小説家として著名な徳富蘆花や、足尾銅山鉱毒事件で著名な田中正造と交友を深めながら、1913年（大正2年）に京都の東の郊外・鹿ヶ谷に、「捨身（供養や衆生救済などのために、自分の身を捨てること）」思想の修養道場として「一燈園」を創始しました。



1917年（大正6年）には、劇作家・倉田百三が戯曲『出家とその弟子』を出版し、その主人公のモデルが天香とわかると、全国にその名と生活が知られるようになります。

さらに、1921年（大正10年）には天香の講和集『懺悔の生活』が出版され、ベストセラーとなり、その存在は全国に知れわたりました。

学校や劇団を創設するなか、1936年（昭和11年）には、修養部「一燈園」が、事業部「宣光社」のある山科四宮の現在地に移転し、現在の「光泉林」が成立しました。一般的には、この「光泉林」のことを「一燈園」と呼んでいます。

天香は、1947年（昭和22年）に参議院議員に当選しましたが、その活動は活発ではなく、「一燈園」を中心に修養の生活に没頭しています。多くの「同人（一体となって共同生活を営んでいる人たちのこと）」と、一燈園での生活を共にし、全国にその活動の共鳴者「光友」を育てています。

長浜では、今も「光友クラブ」が、「西田天香生家」で勉強会などの活動を行なっています。こうした活動が認められた天香は、1967年（昭和42年）に長浜市名誉市民第1号に選定され、その翌年に97歳でこの世を去りました。

天香は、渋沢栄一など近代日本の経済界にも人脈がありました。また、鈴木清一（ダスキン・ミスタードーナツの創始者）は、一時期、一燈園で生活しており、生涯その生き方に共鳴して活動しています。陶芸家の河井寛次郎らとも親交があり、近代日本の経済・思想・芸術に、大きく寄与した人物と言えるでしょう。



鹿ヶ谷に建設された一燈園



西田天香の生家（大宮町）

# 大倉工業創業者 まつだ 松田 まさじ 正二

1914年–2009年



松田正二は、現在香川県丸亀市に本社を持つ合成樹脂フィルムなどを製造する加工メーカー・大倉工業おおくらこうぎょうの創業者です。

正二は、1914年（大正3年）に長浜市朝日町に生まれ、旧制虎姫中学校を卒業したのち、桐生高等工業学校（現在の群馬大学）の繊維工学科に進学、1935年（昭和10年）に倉敷紡績くらしきぼうせきへ就職します。

1945年（昭和20年）、日本は太平洋戦争に負けて終戦となり、陸軍の飛行機製作所として稼働していた倉敷紡績の工場は解散します。

戦後、再出発した倉敷紡績への復帰を誘われますが、職を失った製作所の部下を放っておけないという思いからその誘いを断り、1947年（昭和22年）部下たちとともに「四国住宅株式会社（大倉工業の前身）」を興して住宅事業や製材業にたずさわっていきます。

1955年（昭和30年）、正二は日本に興ったばかりのポリエチレン業に目をつけ、ポリエチレン加工業を始めます。アメリカやドイツへ視察に行き、工場戦略を学んだほか、製品だけでなく工場内の機械装置までも自社開発するなど、技術面にも力を入れ、高品質の製品は海外にも歓迎されました。このとき社名を「大倉工業株式会社」に変更し、国内最大の工場施設を持つ会社へと大きく成長しました。

1985年（昭和60年）に社長職を退き、会長に就任しましたが、その後も丸亀商工会議所会頭や四国経済連合会副会長を務めるなど、経済界において活躍を続けました。

正二は、2009年（平成21年）5月24日に死去します。戦争を経験し、事業においては幾度となく困難にぶつかりましたが、自身の資質や能力、そして努力によってそれらを乗り越えてきた、強い精神力を持つ長浜商人のひとりです。



## 長浜の商工の発展に 多大な功績

まつもと どうじゅうろう  
松本 藤十郎

1845年—1909年

松本藤十郎は、1845年（弘化2年）9月28日、長浜金屋新町（現在の長浜市大宮町）の生糸商、伊勢屋藤兵衛の長男として生まれ、のちに江州長浜の豪商「伊勢屋」として広くその名を知られました。父・藤兵衛は、1856年（安政3年）当時の長浜町長者番付に「東方大関」として名前があげられ、明治の初めには政府の命令で、坂田、東浅井、伊香の3郡から御用金調達の役を務めたとされます。

26歳で家督を継いだ藤十郎は、これまでの江戸・横浜の店を拡充するとともに、京都・大阪にも支店を設けて生糸のほかに縮緬も扱いました。

1870年（明治3年）には、東浅井郡曾根（現在の長浜市曾根町）の大橋半右衛門、同郡落合（現在の長浜市落合町）の西村藤兵衛と力を合わせ、上船町（現在の長浜市朝日町）の元本陣、吉川三左衛門宅（現在の長浜幼稚園）に長浜商社を設置しました。この長浜商社は、現在で言えば商業の繁栄を図るための商工会議所ともいべき画期的な試みでしたが、翌年には国立銀行条例の発布により閉鎖となりました。

また、1873年（明治6年）6月、輸出生糸改良の会社が設立されると、藤十郎は県から取締役を命じられ、翌年には副社長に昇進しました。長浜では、1877年（明治10年）に滋賀県で最初の国立銀行「第二十一国立銀行」が設立、1895年（明治28年）5月に長浜貯金銀行が設立されると、それぞれの取締役となりました。

このように藤十郎は、長浜の商工の発展に多大な功績を残す一方、学校設備や社会公共事業に多額の金品を寄付し、有志13人と共に長浜勸業社を組織して貧困家庭や身寄りのない人などの救済に力を尽くしました。



松本藤十郎が設立した長浜商社があった吉川三左衛門邸宅跡  
（朝日町、現在は長浜幼稚園となっている。）

### ヤンマーホールディングス 株式会社の創設者

やまおか まごきち  
山岡 孫吉

1888年-1962年



JR北陸本線高月駅の西方、<sup>ひがしあつじ</sup>東阿閉の集落には、田園風景には似つかわしくない、ヨーロッパの城を思わせるような建造物が建っています。空にそびえる、3階建てドイツの教会風の建物の名は「ヤンマー会館」。

この地で生まれた、ヤンマーホールディングス株式会社の創設者・山岡孫吉がその出生地に贈ったもので、現在は、自治会館として活用されています。

山岡孫吉は、1888年（明治21年）、農家の6男として生まれました。高等小学校（現在の中学校）を卒業後、16歳の時、大阪に<sup>でっちぼうこう</sup>丁稚奉公に出ました。いくつか奉公先をかえた後、大阪ガス株式会社に勤め、ガスの配管工事や照明用ガスエンジンの工事を経験しました。19歳の時に、山岡<sup>ガス</sup>瓦斯商会を開業し、5年後、山岡発動機工作所と改称します。農家出身の孫吉は、

農作業の省力化にエンジンを用いることを目指していました。

大正時代なかば、石油エンジンの研究・開発を進め、三馬力石油発動機を完成。収穫した稲の<sup>もみす</sup>籾摺り作業に喜ばれたといえます。この発動機の名前は、豊作の象徴であるトンボの王様・ヤンマトンボから、発音しやすいように「ヤンマー」として社名にしたといえます。この名前には、豊かな暮らしの実現に貢献していこうとの思いが込められていました。

1932年（昭和7年）、ドイツで開かれたメッセ（見本市）を訪れた彼は、ルドルフ・ディーゼル博士が発明したディーゼル・エンジンの優秀さに魅せられました。帰国後、若手技師たちとともに、このエンジンの小型化研究に精力を傾けました。翌年の暮れ、世界初の小型ディーゼル・エンジンは完成しました。1936年（昭和11年）、山岡内燃機株式会社（現在のヤンマーホールディングス株式会社）を設立し、以降、全国各地の農家への普及に努めました。

ディーゼル・エンジンの小型化に伴う農機への実用化は、日本の



ヤンマー会館



農村を大きく変えました。当時、稲の粃摺り・精米・水揚げなど、手作業に頼らなければならなかった農作業が、小型ディーゼル・エンジンの実用化によって、大いに農家の助けになりました。また農業分野だけでなく、繊維の織機や製材業など広い分野でも活用されていきました。

孫吉は、大阪の本社工場を中心に、長浜工場・神崎工場を次々と建設。16歳で大阪に働きに出て苦労を重ねた孫吉は、人一倍、郷里に強い思いを寄せていました。若者の働く場所として、戦後はさらに、長浜工場のほか、高月、木之本、西浅井、湖北町などにも工場を建てていきました。

1953年（昭和28年）、ドイツを訪れた孫吉は、ディーゼル博士の恩に報いるため、博士の出身地アウグスブルク市の公園に日本庭園を築造し、好評を博しました。

1955年（昭和30年）、ドイツ発明協会からディーゼル<sup>きんしょうはい</sup>金賞牌、1957年（昭和32年）にはドイツからドイツ大功労十字章が孫吉に贈られました。

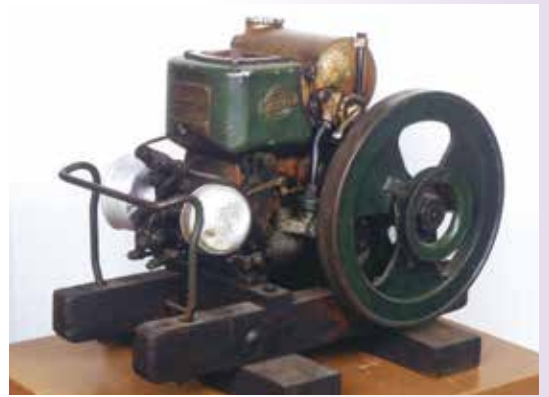
「美しき世界は、感謝の心から」。ヤンマーグループの工場や高月町内の小中学校には必ず建っている石碑です。孫吉は、感謝の気持ちを何よりも大切に、郷土を愛し誇りにしていました。彼は、地域に対する文化・教育の面でも大きく寄与しました。各学校にピアノ、オルガン、地球儀などを寄附したり、公共施設にさまざまな支援をおこなったり、次代を築く子ども達の健全な育成と郷土の発展に尽くしました。

1950年（昭和25年）に設立した財団法人山岡育英会は、向学心を持ちながら修学が困難な青少年のため、孫吉が私財を投じて設立した民間の奨学事業財団法人で、現在は、外国人留学生への支援もおこなっています。

孫吉は、優れた発明家であり、偉大な経営者、そして郷土思いの篤志家<sup>とくしつか</sup>。さまざまな職業を経験し苦労を重ねて、商売や働くことの楽しさと、人のためになることの喜びを見出し、社会に貢献し続けてきた彼の生涯と生き様からは、学ぶべきところが多いのではないのでしょうか。新しい世界をつくるのは人間です。

孫吉が体現した、その人材育成のこころは、脈々と受け継がれています。現在、ヤンマーホールディングス株式会社は、エンジンと農業機械を中心に、エネルギー、マリン、コンポーネント、建設機械などさまざまな事業を展開しています。

2013年（平成25年）には創業100周年を記念して、長浜市三和町にヤンマーミュージアム（2019年リニューアル）が建設され、孫吉のチャレンジ精神を紹介するストーリーシアターや農業・漁業の仮想体験など、体験型の施設として多くの人々が訪れています。



初期の小型発動機



高月町内の小学校に建つ石碑

# 波乱に満ちた多彩な生涯 よしむら まごさぶろう 吉村 孫三郎

1884年—1989年

吉村孫三郎は、1884年（明治17年）母方の越前で生まれました。父は、長浜市野瀬町の川島孫一郎ですが、母方の吉村姓を継ぎ、福井中学（旧制）で学びました。川島家は代々庄屋を務め、ようさん養蚕と生糸製造を業とし、江戸中期以降、京呉服を北陸方面へと卸すようになりました。

中学校を卒業した孫三郎は、1905年（明治38年）、東京・日本橋に「菊神商会」を設立し、新しい繊維である「じんぞうけんし人造絹糸」を取り扱いました。人造絹糸は、洋服の裏地、洋傘地、カーテン等に需要が拡大する成長産業でした。1910年（明治43年）に社名を「吉村商会」に変更し、海軍の御用達人となりました。

その後、1912年（大正元年）に、毛のシャツを製造するメリヤス会社を設立します。毛のシャツは、軽くて暖かいと評判になり、さらにショール、メリヤスと生産分野を拡大し、1916年（大正5年）、東京毛布ショール同業組合の初代理事長になりました。

1921年（大正10年）、京都で「吉村紡績」（現在のヨシボー株式会社）を設立し、1939年（昭和14年）には法人化しました。吉村紡績は、戦後の物不足の時代に力をつけ、1950年（昭和25年）の朝鮮動乱で経営規模を不動のものとししました。孫三郎は、好況は生産過剰と過当競争を招くことを予想し、てがた手形（支払い期日に特定の金額を支払うことを約束した有価証券のこと）によるけっさい決済を固くいましめ、堅実経営による信用を重んじたことにより、着実に社業を前進させました。

孫三郎は、近江商人としての才覚と時流を見きわめる経営手腕に長けていましたが、同時に抱擁力のある円満な人柄が買われ、各界のリーダーに担がれました。1951年（昭和26年）には、京都市東山区から立候補して府議会議員に当選し、中国貿易促進地方議員連盟では、京都府の理事長を務めました。

1954年（昭和29年）、孫三郎らの働きかけで、中国貿易団が来日。孫三郎は大阪、京都などを案内し、日中両国の貿易促進に明るい灯をもたらしました。以後、孫三郎は何度も中国を訪れ、準国賓待遇で歓迎されています。1960年（昭和35年）の「モスクワ日本産業見本市」では、日ソ国交初の経済使節団の副団長に選ばれました。

このほか、1948年（昭和23年）には京都清水寺の総代として、その復興に力を尽くしました。また、文化会を結成し、京都における伝統芸能の発展に協力するとともに、1951年（昭和26年）には日本の古典芸能保存のために文楽会を設立し、無形文化財の育成にも力を入れました。

このように、日中、日ソの貿易や親善に尽くし、文化事業や社寺の復興など幅広く活動した功績により、1962年（昭和37年）にらんじゅうほうしょう藍綬褒章、1965年（昭和40年）にくんよんとうざいほうしょう勲四等瑞宝章を受け、1967年（昭和42年）秋にはきゅうちゅう宮中の園遊会に招待されています。

波乱に満ちた多彩な生涯を送った孫三郎は、1989年（平成元年）8月4日、105歳の長寿を全うして眠るようにこの世を去りました。





### Ⅲ．長浜の老舗企業



“のれんを守る”という言葉があります。のれんは、軒先につるして日よけや目隠しをするための布のことを指しますが、江戸時代以降、<sup>やごう</sup>屋号や商標を染め抜いて店の軒先や出入り口につるし、商家の目印とするようになりました。ここから転じて、店の歴史や実績、<sup>こきやく</sup>顧客からの人気などに裏打ちされた企業の「信用」を意味する言葉にも使われるようになったのです。

長浜には、明治以降に創業し、のれんを守り続けた、いわゆる<sup>しにせ</sup>老舗の企業が多く存在します。長く続いて商売をするということは、並大抵のことではありません。第二次世界大戦後の混乱やバブル崩壊、<sup>ほうかい</sup>リーマンショックなどの金融・経済危機など、幾多の困難を乗り越えながら、のれんを守り続けてきました。

ここでは、1950年（昭和25年）までに創業した長浜の老舗企業を紹介します。

おおつかさんぎょう

# 大塚産業グループ



## 企業データ

【本 社】 長浜市八幡中山町1番地  
【創 業】 1706年(宝永3年)  
【資 本 金】 115,000,000円(グループ合計)  
【従業員数】 215名(グループ合計)  
【事業内容】 繊維、フィルムの製造・販売  
【事 業 所】 工 場/長浜、高浜、中国、ベトナム  
支 店/東京、大阪、名古屋  
営業所/千葉、神戸、京滋奈

大塚産業グループは、繊維業を中心に自動車やインテリアとさまざまな分野で活躍する長浜を代表する老舗企業です。その歴史は、江戸時代中期に、長浜神戸町の商人・大塚吉平(吉兵衛)が開いた保多屋に始まります。

保多屋は、それまでは高級品として扱われていた蚊帳を庶民にも手の届く値段で売り出し、長浜の“浜”の字を取り「浜蚊帳」と名付けました。保多屋の「浜蚊帳」は、「三方よし」(\*)を実践し、各地で好評を博しました。

また、長浜で絹の生産が盛んになるにつれ、絹の生産を開始するなど事業を拡大し、明治時代の中頃には、保多屋の分家から大塚蚊帳工場が発足しました。1935年(昭和10年)に大塚蚊帳工場は大塚蚊帳株式会社に、1940年(昭和15年)には大塚産業株式会社に社名を変更します。この頃には、蚊帳に加え、真綿も中心商品の一つとなっていました。

第二次世界大戦中には、繊維で強化したプラスチックで戦闘機の操縦桿を製作しており、日本有数の企業に名を連ねています。戦後は、主要商品であった蚊帳の需要が減少する中で、蚊帳製作で培った技術を活かし、琵琶湖の葎を用いた壁紙を作り、これがアメリカで評価されたことをきっかけにインテリア部門を立ち上げました。

また、自動車のシートカバーを製作し自動車産業にも参入する一方、蚊帳の生産は、1968年(昭和43年)に廃止しています。

1987年(昭和62年)、大塚産業株式会社(のちに大塚産業クリエイツ株式会社と改称)、大塚産業ソーイン株式会社、大塚産業マテリアル株式会社、大塚産業インテリア株式会社の4社に分社しました。

江戸時代に蚊帳の販売から始まった保多屋が、時代と人々のニーズが移り変わる中で、まずその時代の社会に役立つことを考え、次に買い手のことを考えて事業を展開することにより、あとから利益がついてきて、できるだけ多くの人の役に立つ商いをおこなってきたことが、現在の大塚産業に繋がっています。

※三方よし…「売り手よし、買い手よし、世間よし」の3つの「良し」。近江商人の商売の理念として知られる言葉。商いは、売り手と買い手がともに満足し、また社会貢献もできるのがよい商売であるということ。

## 綱 領

1. 私達は、社会の人びとによって生かされていることに感謝し、これに報ゆるため
2. 私達は、社会の人びとの待ち望んでいる地球にやさしい商品を開発し
3. 私達は、社会の人びとと共に手を携えて地域の発展にも貢献しましょう



こういち

# 江一株式会社



加賀友禅の振袖と帯

## 企業データ

- 【本 社】長浜市八幡東町 622
- 【創 業】1852年(嘉永5年)
- 【設 立】1972年(昭和47年)
- 【資 本 金】100,000,000円
- 【従業員数】97名(2018年3月現在、グループ合計)
- 【事業内容】生糸卸、絹織物、和装製品卸
- 【事 業 所】京都事業所、東京事業所

江一株式会社は、1852年(嘉永5年)創業の歴史ある繊維製品卸の会社です。

創業者の樋口<sup>ひぐちやひち</sup>弥七は、坂田郡南郷里村南小足(現在の長浜市南小足町)に蚊帳<sup>かや</sup>製織を開始します。1890年(明治23年)、樋口<sup>ひぐちまつぞう</sup>松蔵は、蚊帳の原材料・麻<sup>あさかぜ</sup>を北海道製麻会社と取引するなどして、試織に取り組みます。

1903年(明治36年)には、樋口蚊帳製織工場を設立し、40台の織機を導入しました。そして5年後の1908年(明治41年)には工場を増床し、昭和時代の初頭には小巾機88台、大巾機42台、乾燥機2台を持つ大規模工場にまで成長を遂げます。

1967年(昭和42年)、本店を長浜市八幡東町に移転します。1972年(昭和47年)、「江一株式会社」を分社設立しました。社名の「江一」には、「近江で一番の会社になれるよう頑張ろう」との思いが込められているそうです。

業務内容は、生糸の輸入・販売、浜ちりめんの生産および絹織物・友禅きものなど和装製品全般を扱い、原糸から製品まで一貫して扱い、確かな品質と高い技術を提供し続けています。生糸を中国・ブラジルから輸入し、長浜・丹後など全国の絹織物の産地へ販売。白生地仕入・浜ちりめん製織から京都・金沢など友禅メーカーへの販



大正期の工場

売、京都での自主創作、きもの・帯など呉服製品の販売と、一貫した流通をになう全国的にみても数少ない和装卸の会社です。

生活様式の変化とともに、着物に触れる機会が減り、着物離れが続いていますが、これからも伝統的な着物の美を通じて、「常に新しいことに挑戦し続ける」をモットーに社会に貢献できる会社づくりを目指しています。

## 経営方針

- 一、私たちは、伝統技術を生かし原糸より製品に至るまで良心第一で当たり、つねに優れた商品をお客様に提供します
- 一、私たちは、日本美創造のため、つねに研鑽を怠らず美を通じて社会に貢献します
- 一、私たちは、会社の繁栄と社員の幸福を目的として、協同勤務の喜びを分かち合える職場にします

なんきゅう

# 南久ちりめん株式会社



## 企業データ

【本 社】長浜市神照町 544 番地  
【創 業】1877 年 (明治 10 年)  
【資 本 金】40,400,000 円  
【従業員数】15 名  
【事業内容】各種縮緬

南久ちりめん株式会社は、1877年（明治10年）に創業しました。創業時から現在まで、主力製品は「浜ちりめん」と呼ばれる絹織物です。創業当時の手織機（手織りの機械）から始まり、現在は動力織機で織り上げられています。

南久ちりめんでは、髪の毛の約半分ほどの太さの生糸を製糸工場から仕入れ、約50日、40工程以上の時間と手間をかけて絹織物を織り上げていきます。長い工程の中でも一番の特徴は、生糸を湯で煮た後、地下水を掛けながら糸に撚りをかけていく「八丁撚糸」と呼ばれる撚糸方法です。

この八丁撚糸により、浜ちりめんの最大の特徴である「シボ（布の表面の独特の凹凸）」ができるのです。自社工場で撚糸をしているところは少なく、材料から製品になるまでの行程を一つ一つ丁寧に、誇りをもって作業をしていることがわかります。

現在では、絹の特長と長年にわたり蓄積された絹織物に関する知識と技術を活かした商品開発に力を入れています。絹糸の持つシルクたんぱく質が肌に優しく、保湿効果のある浴用ウォッシュタオルや、八丁撚糸による「シボ」が特徴のデニム生地、洋装生地、その他インテリア雑貨や生活雑貨などを作っています。

太平洋戦争中は絹織物の生産が禁止されるなど、厳しい時代を乗り越えて、浜ちりめんの伝統を守りながら、会社の理念である「感謝」と「和」大切に、絹の可能性を広げるための挑戦を続けています。



生シルクのボディタオル



ちりめんのガマ口

## 理 念

『感謝』と『和』



# やましょう 株式会社山正



## 企業データ

【本 社】	長浜市内保町 238 番地 2
【創 業】	1895 年 (明治 28 年) 9 月
【設 立】	1983 年 (昭和 58 年) 1 月
【資 本 金】	20,000,000 円
【従業員数】	27 名
【事業内容】	鍼灸材料製造販売
【事 業 所】	東京営業所、ネパールヤマショウ (Yamasho Private Limited) 長安山正艾織中薬加工場 (協力工場)

株式会社山正は、1895年(明治28年)、長浜市野瀬町に「山正押谷小助商店」として創業しました。百人一首にも歌われた「もぐさ」の最高級品とされる「伊吹もぐさ」を長年の経験と家伝秘法により製造販売しています。

現在では、<sup>しんきゅう</sup>鍼灸治療用の<sup>はり</sup>鍼の製造も行っており、鍼灸材料の総合メーカーとして、品質にこだわり抜いた商品を全国の鍼灸院へ販売しています。

山正の主力商品である台座付きのお灸は、4種類の熱さを選べるもので、最も温度の低いお灸は、眼精疲労や脳疲労・美顔など、美容やメンタルケアへの有効性が期待されています。山正では、顔への施灸を広めるため、全国各地でセミナーを開催し、商品の魅力や有効性をPRしています。

また、体の不調を治す治療といった分野だけでなく、スポーツや美容・メンタルヘルスなどさまざまな分野での鍼灸の有効性を広め、幅広くお灸を利用してもらうきっかけづくりを展開しています。その一つが、「山正マラソン部」の活動です。マラソン部といっても、実際に走るわけではなく、全国で開催されるマラソン大会での「お灸無料体験コーナー」の出店です。どの大会も列ができるほどの盛況で、スポーツケアとしてのお灸の魅力を広める良い機会となっています。

山正は、「安全で安心なものづくり」を全社員の合言葉とし、どこまでも品質第一主義にこだわり、人々の健康生活に貢献する会社を目指しています。

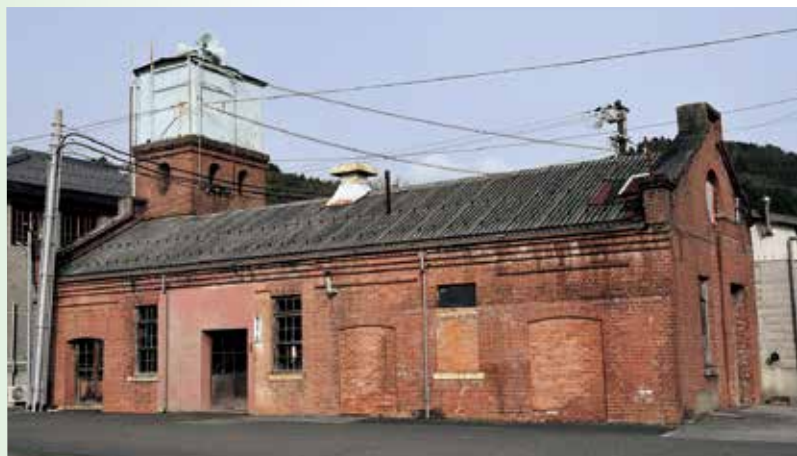


## 経営理念

株式会社 山正は『安全で安心なものづくり』を全社員の合言葉とし、どこまでも品質第一主義にこだわり、鍼灸治療用品の製造を通して東洋医学の発展に努め、人々の健康生活に貢献する会社を目指します。

お お み

# 近江ベルベット株式会社



## 企業データ

【本 社】 長浜市石田町 533  
【設 立】 1905年(明治38年) 2月11日  
【資 本 金】 50,000,000円  
【従業員数】 48名  
【事業内容】 静電毛製品  
(全面植毛製品・成型植毛製品)、  
ベッチン、コールテン、  
各種パイル織物などの製造  
【事 業 所】 大阪営業所(大阪市中央区)

ベルベットは表面が起毛した優雅な光沢と柔らかさのある絹の織物で、ビロード(天鷲絨)とも呼ばれます。近江ベルベット株式会社は、長浜の地場産業であるビロード製造からはじまった創業110年を超える老舗企業です。1905年(明治38年)、日露戦争に出征した地元軍人の家族を救済するために、北郷里村石田(現在の長浜市石田町)で設立されました。



綿製の起毛織物であるベッチンの輸入増加によりビロードが下火になると、1910年(明治43年)には東洋で初めてベッチンの試織・量産化に成功。1920年(大正9年)には、事業拡大と新製品開発のため株式会社となり、従業員持ち株制度や滋賀県初の健康保険組合など、先進的な福利厚生にも力を入れました。

しかし、昭和に入ると戦争によりぜいたく品が制限され、ビロードやベッチンは生産休止。1943年(昭和18年)には軍需工場に転換して、飛行機のエンジン部品やバネ、翼用羽布の製造でしのぎました。

戦後あらためてベッチンの生産を再開し、1951年(昭和26年)には昭和天皇が行幸するなど長浜の戦後復興の1ページを飾りました。しかし不況による売上減少とみるや、1962年(昭和37年)には電気植毛による起毛繊維製造技術を開発。1985年(昭和60年)には本流だった織物生産から撤退し、現在は電気植毛技術によって化粧用パフや自動車の内装材、コピー機のローラーなどさまざまな工業資材・精密機器を製造しています。

「事業の社会性を自覚し奉仕を旨とせよ。創意を生かし常に新製品の開発に努力せよ。責任感に徹し協調と和合に努めよ」の社訓のもと、地場産業の技術を時代に合わせて変化させ、現在も長浜の繊維業をけん引する企業です。

## 社 訓

- 一、事業の社会性を自覚し奉仕を旨とせよ
- 一、創意を生かし常に新製品の開発に努力せよ
- 一、責任感に徹し協調と和合に努めよ



び わ そ う こ  
琵琶倉庫株式会社



企業データ

【本 社】長浜市祇園町 727 番地の 8  
 【創 業】1906 年 (明治 39 年) 11 月 18 日  
 【資 本 金】71,000,000 円  
 【従業員数】147 名 (パート社員含む)  
 【事業内容】倉庫業・貨物運送事業・不動産賃貸業  
 【事 業 所】本社・本社営業所、バイパス営業所、浅井営業所、  
 浅井南営業所、彦根営業所、彦根南倉庫、  
 インター営業所・インター定温倉庫、末広営業所、  
 米原倉庫

琵琶倉庫株式会社は、1906 年 (明治 39 年) に長浜町北船 (現在の長浜市北船町) で高野七郎<sup>たかのしちろう</sup>により創立されました。当初は置き倉庫業だけでなく、<sup>まゆ</sup>繭乾燥業や、後には火鉢・こたつなどの燃料として使用される<sup>たどん</sup>炭団・<sup>まめたん</sup>豆炭などの固形の燃料製造も行っていました。

現在は、保管、入出庫作業、流通加工、輸配送、情報処理など統括的に提供する倉庫業として、穀物・製品・産業用原材料など多くの商品を扱い、地域社会の発展に貢献する物流企業として活躍しています。

県内有数の倉庫面積を誇り、顧客から預かった多種多様な商品は、その特性に合った倉庫を見極めたうえで保管し、最新物流システムにより管理し顧客のもとへ届けることができる、社会の変化や多様な顧客ニーズに応える力のある会社です。

2019 年 (令和元年) に掲げた企業理念からは、顧客・協力会社・従業員を大切にする地域に根差した会社でありたいという思いと、独自性で他社との差別化をはかるオンリーワン企業を目指すという力強い面が感じられます。

倉庫業は、商品と人をつなぐ橋渡しともいえる役割で、人の生活に身近で、なくてはならない存在であることが誇りであり、地域社会に貢献する喜びを直に感じ取れる魅力があります。



企業理念

素直に 正直で 誠実に。～想いを届け、誇れる会社になる～

# じょう カネ上株式会社



#### 企業データ

【本 社】 長浜市平方町 720-15  
【設 立】 1912年 (明治 45年)  
【資 本 金】 30,000,000 円  
【従業員数】 現在約 80 名、創業当時約 30 名  
【創業場所】 三重県四日市市  
【事業内容】 魚肉ねり製品製造業  
【事 業 所】 工場は本社のみ  
長浜えきまちテラス内に一般向けの店舗

カネ上株式会社は、1912年 (明治45年)、三重県四日市市に創業以来、かまぼこの製造と販売を行っています。主に業務用のかまぼこを外食産業や学校給食分野へ提供しており、長浜の学校給食でも七夕に黄色い星型のかまぼこなどが提供されています。

三重県で創業したカネ上ですが、長浜に工場を移したのは1948年 (昭和23年)、2代目樋口治氏のときです。当初は福井県小浜などから仕入れた魚をさばいてすり身にするところから製造していましたが、1975年 (昭和50年) 頃から冷凍のすり身を用いることで量産が可能となり、県内外へと販路を広げていきました。

樋口氏は製造技術の向上に力を入れ、最初から切れ目があり、板のついていないかまぼこを作る製造法を開発し、画期的な技術として注目されました。このほか、絵柄の入ったかまぼこを作る技術が非常に優れ、大手企業からも厚く信頼されています。その背景には、<sup>エス ハ サ ッ プ</sup> S-HACCPという滋賀県食品自主衛生管理認証制度に真っ先に取り組むなど、徹底した衛生・品質管理があります。



カネ上は、会社の方針として「和」を掲げています。果たすべき責務を自覚し、正しい仕事を通じて、顧客や得意先、従業員同士の「和」と限りある資源を大切にし、安全に裏付けられた、安心して食べてもらえる美味しい食品を提供し続けるという思いが込められています。料理において、なくてはならない存在として、これからも見た目にも美しく、安心して食べられるかまぼこを提供することを目指しています。

#### 企業理念

すべての従業員が、フードチェーンの一員として果たすべき責務を自覚し、正しい仕事を通じて、お客様や得意先、従業員お互いの『和』と、限りある資源 (命) を大切にし、安全に裏付けられた安心して食べていただける美味しい食品を提供し続けます。



ざいみつこうむてん

# 株式会社材光工務店



## 企業データ

- 【本 社】 長浜市八幡東町 428-1
- 【設 立】 1918年(大正7年)5月
- 【資本金】 94,000,000円
- 【従業員数】 53名(2019年4月)
- 【事業内容】 特定建設業・一級建築士事務所・  
宅地建物取引業
- 【事業所】 湖南営業所、栗東営業所

株式会社材光工務店は、1918年(大正7年)5月に、三ツ矢町で土木建築請負業を開業しました。その後、1947年(昭和22年)に有限会社に、1965年(昭和40年)に株式会社に組織変更を行い、現在に至ります。

土木建築請負業のほかに、1965年(昭和40年)7月には宅地建物取引業、1969年(昭和44年)4月には保険代理業を併設するなど、着実に事業を拡大してきました。

1972年(昭和47年)8月に八幡東町の新社屋へ移転し、その後も国道8号線バイパス沿いにカラフルタウン<sup>キャンパス</sup>can'sをオープンさせるなど、事業の拡大を続けています。

さらに、コンクリートリサイクルプラントの開設や、株式会社びわ緑化、大清水改良土センター設立など、環境保護にも力を入れています。

創業から100年を越える老舗企業である材光工務店は、地元・長浜市を拠点とし、「建物を造ることを通じて街を造る」をキーワードに、豊富な経験のもと顧客の信頼を積み重ね、住宅のみならず市内ホテルや、イオン長浜店などのショッピングセンター、長浜市役所本庁舎などの公共施設の建築も請け負う、地域社会の創造に一役買っている企業です。



長浜市役所本庁舎

## 企業理念

### 請負の心

建築は請負であり、請負とは信頼を請け、総体責任を果たすことである。  
我々は、その信頼に応えるため、材光の最高の品質を常に提供する。

ごうしゅうさんぎょう

# 江洲産業株式会社



## 企業データ

- 【本 社】長浜市口分田町 368 番地
- 【創 業】1922 年 (大正 11 年) 6 月
- 【設 立】1949 年 (昭和 24 年) 2 月 11 日
- 【資 本 金】64,620,000 円
- 【従業員数】50 名
- 【事業内容】産業資材用織物製造、産業資材用織物・不織布樹脂加工、フレキソ印刷加工、その他付随業務

長浜には、「浜<sup>はま</sup>ちりめん」と並んで重要な位置を占める織物産業に「浜<sup>はまがや</sup>蚊帳」があります。明治時代以降、大規模な工場が長浜周辺にいくつも建設され、「浜蚊帳」は日本全国に販売網を拡大し、近江を代表する蚊帳のブランドとなりました。その生産を担っていた会社のひとつが江洲産業株式会社です。

江洲産業は1922年(大正11年)に長浜市<sup>くもて</sup>口分田町で創業しました。戦中・戦後は、製造用資材の入手に苦労しながらも、さまざまな工夫で事業を拡大していき、当時としては新しい技術であるサラン蚊帳(塩化ビニル製)の生産にも挑戦し、現状に満足することなく会社を成長させていきました。

1965年～1974年(昭和40年代)頃から、日本での蚊帳の需要は次第に減少し始め、長浜市内にあった蚊帳工場も、別製品の製造に業務を転換し、浜蚊帳の生産は時代と共に消え去っていきます。しかし、江洲産業は現在まで「蚊帳製造」を基本技術とした織物の製造や、加えて「樹脂加工」「印刷<sup>ほうせい</sup>縫製」など新たな分野にも事業を拡大し、その製造物は私たちの生活に身近な花のラッピング資材や掃除機のフィルター、ほかにも自動車産業、医療用途など、時代のニーズに合わせて幅広く使用されています。

2020年(令和2年)で創業98年を迎える江洲産業は、長浜の伝統を受け継ぎながらも、繊維のプロ集団として時代の変化に合わせて進化する「開発型好奇心企業」と自負しています。



家内壁用透湿防水シート



花ラッピング用資材

## 経営理念

企業は人なり。創業の心(敬神・誠実・感謝)を忘れず、信頼される製品づくりを通して、社会に奉仕し、誠心にして活力ある経営を理念とする。



ながはましんようきんこ

# 長浜信用金庫



## 企業データ

【本 社】	長浜市元浜町 3 番 3 号
【創 業】	1923 年 (大正 12 年) 10 月 11 日
【資 本 金】	出資金 784,000,000 円
【従業員数】	215 名 (役職員)
【事業内容】	金融機関
【事業所】	15 店舗 (長浜市・米原市)

長浜信用金庫は、長浜市・米原市内に 15 店舗を有し、預金、融資、為替など私たちの日常生活に欠かせない金融機関の一つです。今年で創業 97 年、2023 年 (令和 5 年) 10 月には創立 100 周年を迎えます。

「信用金庫」は、住民や地元の中小企業など、地域の人々が利用者・会員となって互いに助け合い、発展していくことを目的に運営される相互扶助型の金融機関で、長浜信用金庫は、1923 年 (大正 12 年)、当時の長浜町議会の賛同を得て、町からの助成金 500 円をもとに、長浜市錦町 (現在の長浜市大宮町) で業務を開始しました。

以来、地域との共存共栄を経営理念として「地域密着型金融」に取り組み、「情報力」や「つながり」等の強みを生かして、定期的な訪問活動の実施など密度の高いサービスの提供や、金融仲介機能・コンサルティング機能を発揮し、中小企業の支援を進めています。

近年は、市内における人口の減少や高齢化、事業所数の減少等により、経営に与える影響は深刻なものとなっていますが、経営努力により一定の収益を確保することで自己資本を蓄積し、経営基盤の拡充を図っています。

さらに、地域と共に歩み続ける金融機関として、「びわ湖長浜ツーデーマーチ」や「長浜芸術版楽市楽座 アートインナガハマ」など地域イベントへの協賛、職員のボランティアとしての参加などの活動も行っています。

長浜信用金庫は、地域社会との「絆」を大切にし、地域の人々とさらなる連携強化をはかりながら、地域の活性化、持続的発展を目指しています。

## 基本理念

地域金融の担い手として与えられた社会的使命と役割に誇りを持ち、地域と地域の人々との共感と信頼を大切に、健全経営のもと活力ある長浜信用金庫を目指す。

めいぶんしゃいんさつしょうじ

# 明文舎印刷商事株式会社



## 企業データ

【本 社】 長浜市森町 386 番地  
【創 業】 1923 年 (大正 12 年)  
【資 本 金】 12,000,000 円  
【従業員数】 118 名  
【事業内容】 印刷・印刷関連、商社 (紙・パルプ)、  
通販・ネット販売、広告  
【事 業 所】 東京 office、大阪 office

明文舎印刷商事株式会社は、1923年 (大正12年) に中村兼三郎が印刷業を開業したことに始まります。当時は長浜駅近くの住宅兼工場で、住み込みの活版職人<sup>かっばん</sup>とともに営業活動を行っていました。昔の印刷は、活字を1文字ずつ組み合わせて版を作る「活版印刷」で、とても手間がかかるやり方だったため、ページ数の多い本を作る場合は、多くの職人が期間工として働いていたのです。

その後、今からおよそ50年前の1973年 (昭和48年) に、これからはコンピューターの時代がやってくると考えた2代目社長の中村尚氏が、現在の本社がある長浜市森町に、当時では珍しいコンピューター用印刷物の専用工場 (ビジネスフォーム工場) を作りました。当初は技術的にうまくいかず、失敗した印刷物に埋もれるというような状態で、注文も少なく、苦勞の連続でした。

ようやく失敗なく印刷できるようになってきた頃、コンピューターが全国に普及し始め、他社ではあまり扱っていないコンピューター専用印刷物ということから、多くの注文が入るようになりました。1976年 (昭和51年) には工場の増築を行い、本社も森町に移転しました。手探りで始めたビジネスフォーム印刷でしたが、現在では、明文舎印刷のメインとなる業務です。

「技術は社会のために」をモットーに、蓄積された経験とノウハウを生かしながら、印刷を通して地域に貢献することを目指しています。



## 経営理念

- 一、売って喜び、買って喜ぼう!
- 一、楽しく働き、日々を感謝しよう!
- 一、職業を通じて社会に奉仕しよう!



# こうさん ハヤミ工業株式会社



## 企業データ

【本 社】	長浜市木之本町黒田 313-2
【創 業】	1927年(昭和2年)5月
【設 立】	1954年(昭和29年)4月
【資本金】	80,000,000円
【従業員数】	90名(2020年2月)
【事業内容】	機能性組紐の製造、 AVファニチャーの開発・販売
【事業所】	支店=東京、大阪 営業所=仙台、名古屋、福岡

ハヤミ工業株式会社は、1927年(昭和2年)5月、初代の速水千代次<sup>はやみちよじ</sup>が木之本地蔵院(長浜市木之本町木之本)の近くでラジオ店を創業したのが始まりです。千代次は、日本橋で仕入れた部品で製作したラジオを販売し、ラジオのチューナーに地元の生糸を使ったところ大変相性が良く、次第に全国の電気店でも販売するようになりました。

1948年(昭和23年)には和楽器系(三味線・琴糸)の製造を始めます。さらに、これらの糸を使ったラジオのダイヤルコードやステレオ用のスピーカーネットの製造を開始し、1954年(昭和29年)に速水楽器系株式会社を設立しました。この時のノウハウが糸を専門に扱う現在の「ハミロン事業部」へと受け継がれています。

また、ステレオ用スピーカーネットの納品先である木工工場<sup>もっこう</sup>との繋がりから、1975年(昭和50年)4月、自社でデザインを手がけたオーディオラックやスピーカースタンドの企画・販売が始まりました。これが「ハミレックス事業部」の誕生です。当時はオーディオブームで、丈夫で重厚感のあるハミレックスの製品は多くのユーザーから好評を博しました。1977年(昭和52年)には、商号をハヤミ工業株式会社に改称。

ハミロン事業部は楽器店ではなく電気店へ、ハミレックス事業部も家具店ではなく電気店<sup>おろ</sup>へ卸していたことで、同業種の中でも生き残り、利益を出すことができました。

こうした昔ながらの技術を生かしながらも、時代のニーズに合わせた製品を生み出していく姿勢が評価され、2017年(平成29年)12月には経済産業省が選定する「地域未来牽引企業<sup>けんいん</sup>」に選ばれました。

## 目指すこと

お客様のニーズの先にある「最適」をカタチにする事業を展開。

かねぼう

# KBセーレン株式会社 長浜工場〈旧鐘紡〉



## 企業データ

- 【長浜工場】長浜市鐘紡町 1-11
- 【創業】1930年(昭和5年) 11月11日
- 【設立】2005年(平成17年) 5月2日(本社)
- 【資本金】3,440,000,000円(会社全体)
- 【従業員数】553名(2019年3月、会社全体)
- 【事業内容】合成繊維の製造・販売、繊維素材の編立・加工・販売、繊維二次製品の製造・販売
- 【事業所】大阪本社、東京支社、北陸合織工場、長浜工場

KBセーレン株式会社長浜工場の前身である鐘淵紡績株式会社(鐘紡)長浜工場は、1930年(昭和5年)11月、東洋一の絹布工場として琵琶湖畔の南呉服町(現在の長浜市鐘紡町)に創業しました。当時の敷地面積は約16万5,000平方メートルと広大で、県下屈指の大工場として、縮緬・ピロード製織を行っていました。長浜は水質・交通・輸送などの面で立地条件が良かったため大企業が多く進出し、鐘紡もすでに1920年(大正9年)には工場建設の計画が持ち上がっていました。

1982年(昭和57年)にはカネボウ大阪・淀川工場から綿織物の染色・捺染(布地に模様を印刷する染色方法)設備を移設し、ファッションの時代に対応した総合加工工場となりました。

2005年(平成17年)5月、カネボウの主な繊維事業を引き継ぎ、福井の繊維企業・セーレン株式会社のグループ会社のひとつである「KBセーレン株式会社」として新たに発足しました。

現在は、合成繊維・複合素材の染色加工やマイクロファイバーの加工と製品化を主な業務としており、製糸から縫製まで一貫した生産体制と、他社が真似できない高い技術やノウハウを生かして、顧客のニーズにえています。

なお、長浜工場の所在地である「鐘紡町」の名称は、東京都墨田区鐘ヶ淵で創業した「鐘ヶ淵紡績株式会社」の社名に由来します。日本各地に「鐘紡町」という地名が存在していますが、長浜と同じくカネボウの工場があったことを示しています。

**企業理念** 「のびのび」「いきいき」「ぴちぴち」という三つのキーワードで、自主性・責任感・使命感を表現。明確なコンセプトに基づいて、グループ内で働く全員の意識を統一しています。

のびのび いきいき ぴちぴち ~自主性と責任感と使命感をもって~		
自主性—のびのび	責任感—いきいき	使命感—ぴちぴち
常に、新たな発想 果敢な挑戦 確かな実行	「不可能を可能に」 我々の本当の仕事は 「問題を解決すること」	お客様にどのような 貢献ができるのか お客様の立場で考えよう
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">                     目指すはグッドカンパニー 株主、お客様、社員、地域社会にとってよい会社                 </div>		



# 株式会社山久



## 企業データ

【本 社】長浜市八幡中山町 1202-5  
 【創 業】1931年(昭和6年)6月6日  
 【設 立】1957年(昭和32年)7月  
 【資本金】96,000,000円  
 【従業員数】79名  
 【事業内容】機械工具専門商社  
 【事業所】彦根営業所、近江八幡営業所、  
 水口営業所、大津営業所、高島出張所、  
 大垣営業所、タイ(バンコク)

株式会社山久は、長く彦根市で機械工具商として実績を上げていた荻田本店の平山芳三郎ひらやまよしさぶろうが、1931年(昭和6年)に神前西町(現在の長浜市宮前町)に長浜出張所を開業したのが始まりです。

1957年(昭和32年)、高田町(現在の長浜市高田町)に移転し、山久機械工具有限会社と改称。その後、現在の八幡中山町にビルを新築し、社名を株式会社山久機械と改め(1992年に株式会社山久となる)、機械工具部品の専門商社として今日まで発展してきました。

創業当時は、浜ちりめんを生産する工場が周辺に多くあったことから、糸を織り上げ織物へと仕上げる機械である織機しよつきの部品を生産者へ納めていました。

その後は、大規模工場の進出とともに、工作機械、切削工具、測定工具、油圧・空圧機器、駆動・制御部品、環境改善機器など、取扱商品の充実をはかり、これらを提供することで「ものづくり」の現場を支えています。

会社として発展するためには人材教育が重要であると考え、業務に必要な専門知識を学ぶ勉強会への参加や資格取得を奨励するなど、結果を出せる人材育成に努めてきました。また、仕事と子育て、介護の両立ができる環境を整えたり、地域貢献として清掃活動や「山門水源の森」やまかどすいげん(長浜市西浅井町山門)のネーミングライツ(\*)の取得に取り組みなど、人や地域とのつながりを大切にすることで、地域貢献を目指しています。

※ネーミングライツ…公共施設等に企業やブランド名を名称として付与する権利のこと。



## 企業理念

「人と地域に、安心という名の信頼。」

とうあこうぎょう

## 東亜工業株式会社



### 企業データ

【本 社】長浜市平方町 366 番地 3  
【設 立】1935 年(昭和 10 年) 2 月 22 日  
【資 本 金】48,000,000 円  
【従業員数】36 名  
【事業内容】セメント系資材、土木建築資材販売、  
生コンクリート卸売販売、  
建築一式工事、各種土木工事  
【事 業 所】福井営業所、東京出張所

東亜工業株式会社は、セメント販売、建築一式工事、各種土木工事、建設土木資材販売を主な事業として展開している企業です。

創業者の一人である<sup>はたけやまひでまつ</sup>畠山秀松は、大阪で農業用肥料の販売会社に勤務していました。その後、<sup>はんろ</sup>販路を広げるため、良質な石灰石を探していました。畠山は、京阪神に近い好立地の<sup>さめがい</sup>坂田郡醒井村(現在の米原市醒井)で産出される石灰石を分析し、これが良質であることを発見します。この良質な石灰石を扱う会社で働いていたのが、もう一人の創業者である<sup>こうどいちろう</sup>神門一郎でした。

1935年(昭和10年)、畠山が社長、神門が取締役工場長となり、農業用石灰(肥料用)と工業用石灰を販売する会社「東亜工業株式会社」を設立しました。

日本の工業化が進む中、1953年(昭和28年)には大阪<sup>ようぎょう</sup>窯業セメント株式会社(現在の住友大阪セメント株式会社)伊吹工場を誘致し、同時に長浜と大阪本社の2拠点体制で滋賀県・大阪府の特約販売店となり、セメント販売業務を展開しました。

社会の変動により自動車が普及すると、北陸自動車道などの開発事業が増え、セメントの需要が高くなり、売り上げを伸ばしました。また、工事などで作業のノウハウや良質な工事手法などを学んだことから、工事資材の販売の需要を伸ばし、現場での「技術・資材・人」をつなぐ役割を重視することで、効果的な人のネットワークを構築することができました。

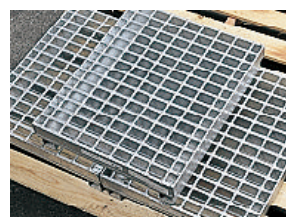
<sup>くつみずふみお</sup>沓水文男氏が4代目社長に就任してからも、現場と人のつながりを大切に、「取引先のニーズに迅速に応える」ことをモットーに、長浜の発展に貢献することを目指しています。



セメント



コンクリート二次製品



鋼材二次製品

### 企業理念

三方よしの精神のもと、夢や喜びを提供し 社会発展に貢献出来る企業を目指す。



ざいのぶこうむてん

# 株式会社 材信工務店



## 企業データ

- 【本 社】長浜市八幡東町 237 番地
- 【創 業】1935 年 (昭和 10 年) 10 月
- 【資 本 金】20,000,000 円
- 【従業員数】60 名 (NoveWorks 株式会社、株式会社イトウ従業員を含む)
- 【事業内容】建築工事の請負、建築工事の設計・監理、不動産の仲介斡旋・管理・賃貸・評価
- 【事 業 所】本社、長浜店、Panasonic リフォーム club リファイン長浜、栗東店、土地プラザ彦根事業所

株式会社材信工務店は、地域密着型で多くの人々のニーズに合った家づくりや、まちづくり、そして町の再生に取り組み、新たな文化の発信と滋賀の古き良き物を残す仕事をしています。その歴史は古く、1935年(昭和10年)に創業しました。

創立当初の会社名は「材信伊藤工務店」。家屋建築の会社で、戦時中は軍事用の箱なども作りました。戦後は、個人住宅のほかにも、共同企業体 (JV) のひとつとして、長浜北小学校や長浜城歴史博物館、曳山博物館、近年では、ながはまさざなみタウンなど、地域に密着した公共施設の建築工事を行っています。

また、地域の再開発や、空き家物件のリニューアルなどにより、地域の活性化をはかり、まちなかの再生が進み、にぎわいが見られるようになりました。さらに、建物の耐震構造やデザインにも力を入れており、誰もがあこがれるような建物づくりを進めています。

企業理念として、「日々知識と技術の研鑽に努め、良き提案と、信頼出来る施工を行う事を以て社会資本の充実に貢献します。」を掲げ、夢を形に変える家づくりから、地域の公共施設建設などを担い、新たな文化の発信に協力しています。

さらに、「滋賀の『残す』を作る」という仕事に重点を置いています。これは古い建築物を壊し、建て替えるのではなく、歴史ある建物は内装をリニューアルして残し、町並みの良さを次の世代に継承していくというものです。滋賀県には、多くの歴史的町並みが残されており、これからも多くの歴史的建造物の良さが見直されていくことでしょう。



さざなみタウン



曳山博物館

## 企業理念

私たちは、人が「集い・語らい・働く」建物に「風格と良好なる環境」を与えるために、日々、知識と技術の研鑽に努め、良き提案と、信頼出来る施工を行う事を以て、社会資本の充実に貢献します。

いたちぼりせいさくじょ

# 株式会社立売堀製作所



## 企業データ

【本店】長浜市湖北町小倉 280 番地  
【本社】大阪市西区立売堀 1 丁目 10 番地 10 号  
【創業】1936 年 (昭和 11 年) 4 月 1 日  
【設立】1947 年 (昭和 22 年) 6 月 13 日  
【資本金】90,000,000 円  
【従業員数】231 名  
【事業内容】消防器具の設計・製造・販売  
【事業所】支社=大阪、東京、中部 (名古屋)、  
西部 (福岡)  
営業所=札幌、仙台、横浜、静岡、  
京阪 (京都)、広島、  
四国 (愛媛)、沖縄

株式会社立売堀製作所は、1936 年 (昭和 11 年) 4 月に竹村満年<sup>たけむらみつとし</sup>により大阪市西区北堀江に創業された竹村工業所が始まりです。創業当初は、水道用品の取扱いや船舶用バルブ<sup>せんぱく</sup>の製造販売をしていましたが、その後、不凍式地上消火栓<sup>ふとうしきちじょうしょうかせん</sup> (凍結しない地上式の消火栓) の特許を取得し、以降は消防用器具の製造販売を始めます。

1947 年 (昭和 22 年) 6 月には竹村工業所を廃業し、株式会社竹村工業所を設立、翌 1948 年 (昭和 23 年) に株式会社立売堀製作所と改称しました。

1961 年 (昭和 36 年) になると、大阪市から製造部門の業務拡大として、創業者・竹村の妻のゆかりの地であった滋賀県北部の伊香郡木之本町川合<sup>かわい</sup> (現在の長浜市木之本町川合) に工場 (川合工場) を設立しました。

その後、ビル用設備の消火栓需要拡大にともない、1963 年 (昭和 38 年) に速水工場<sup>はやみ</sup> (長浜市湖北町) を、1969 年 (昭和 44 年) には高月工場 (長浜市高月町) が設立されます。

立売堀製作所は創業こそ大阪ですが、縁あって長浜に進出し、現在も長浜にある 3 つの工場 (本社工場、高月工場、川合工場) で屋内消火栓設備やスプリンクラー設備、消火栓 (地上式・地下式) などの消防器具の製造を行っています。

現在製造する防災設備の対象は、ビル、文化財、石油コンビナート・発電所、トンネル、ごみ焼却プラント、小規模住宅などおよそ 20 種類、防災製品になると 1,000 種類以上にもなり、国内シェア 50 パーセントを超える消火栓トップメーカーとして、地域の人々の命と生活を守っています。

## 社 是

I.S (アイエス) 精神で前進しよう

・愛情をこめた製品   ・誠意に溢れた販売   ・和をモットーにした経営



# エルナープリントドサーキット株式会社



## 企業データ

【本 社】長浜市田町 30  
 【設 立】1937年(昭和12年)  
 【資本金】1,800,000,000円  
 【従業員数】450名(正規330名、派遣120名)  
 【事業内容】プリント配線板の製造・企画・販売  
 【事業所】営業所=神奈川、大阪、愛知

エルナープリントドサーキット株式会社(略称:EPC)は、プリント基板(あらゆる電子機器に必ず使用される主要部品の一つ)の製造・企画・販売を行う会社です。

その歴史は、1937年(昭和12年)に設立され、80年以上の歴史があります。創立当初の会社名は「太陽スレート株式会社」。屋根に<sup>あ</sup>く薄いセメント板(スレート板)を製造していました。戦後は、コンデンサーなどの電子部品の製造に転じ、その延長に現在があります。

普段の生活の中で、プリント基板などを目にするのは、まずありません。なぜなら、プリント基板は、電気製品の頭脳をつかさどる部品だからです。プリント基板は研究によって、片面プリントから両面プリントに、そしてさらに多層式し、現在では0.6~1.6mmの厚さの基板に4~8層が重ねられているなど、どんどん薄く小型化し複雑になっています。

自動車の電子制御やナビゲーションシステム、通信機器、医療機器、そして薄型液晶テレビなどの家庭用電化製品、ゲーム機など、現代社会の多種多様な製品に、この会社が製造・開発した基板が使われています。各家庭でも、知らず知らずのうちに必ずいくつかは使われているのです。



近年、特に注目されている、自動車の自動運転機能や障害物を感知して自動で停止する機能などにも、この会社の技術が生かされています。田園風景の中にたたずむ会社ですが、最先端の電子技術を研究・開発して世界に送り出している、グローバルな会社です。

## 経営理念

当社は、品質の追求と環境の調和に努め、お客様の良きパートナーとして信頼を築き、社業の繁栄を通して社会に奉仕いたします。

# でんし ワボウ電子株式会社



## 企業データ

- 【本 社】長浜市平方町 730 番地
- 【創 業】1941 年 (昭和 16 年)
- 【資 本 金】35,000,000 円
- 【従業員数】350 名
- 【事業内容】プリント基板製品の製造及・販売、  
太陽光発電セル加工・販売、  
電子部品製造、  
精密機器設計・製作及び販売
- 【事 業 所】本社工場、浅井工場、加納工場、  
西上坂工場、  
長浜設計事務所 (本社工場内)、  
野洲設計事務所、蘇州工場 (中国)

ワボウ電子株式会社は、太平洋戦争が始まった1941年（昭和16年）、紡績・織物等繊維製品の製造販売を目的に設立された「日本和紡絹糸製品株式会社」が前身です。1969年（昭和44年）には、現在の社名に変更して、紡績事業から完全撤退し、異業種である半導体製造事業に転換しました。

現在は、半導体部品製造から、デジタル化や再エネルギーの活用など時代の要請に応じ、プリント基板の実装、試作、設計、ソーラーパネルの製造・加工等の事業に取り組んでいます。主力である「プリント実装基板」は、AIやロボット、5G通信、<sup>アイ・オー・ティー</sup>IoT（※）等の新種のテクノロジーを実現するためには、不可欠なものであり、有望市場のモノづくり会社です。

新しいテクノロジーの進展に合わせて、プリント基板の小型化や難易度の高い基板設計など、多様化する顧客のニーズに高品質で応えるため、生産体制の整備や技術開発を進め、基盤回路の試作・設計から量産までの一連作業を行い、メーカーに代わってモノづくりの現場を担っています。

長浜市内に本社工場（平方町）、浅井工場、加納工場、西上坂工場があり、従業員の大半が地元の出身です。このことから、地域経済への貢献度が大きく、成長が見込まれる中核企業として、2017年（平成29年）に経済産業省から「地域未来牽引企業」に選定されました。

※IoT(Internet of Things) …モノに通信機能を搭載してインターネットに接続・連携させる技術のこと。



## 経営理念

- ・お客様の為に、より一層信頼される会社づくりを目指します。
- ・全社員の為に、安心して誇りを持って働ける会社づくりを目指します。
- ・天下国家の為に、地域社会にお役に立つ会社づくりを目指します。



たかはしきんぞく

## 高橋金属株式会社



## 企業データ

【本 社】	長浜市細江町864-4
【創 業】	1940年(昭和15年)
【設 立】	1958年(昭和33年)
【資 本 金】	98,325,000円
【従業員数】	300名
【事業内容】	精密金属プレス部品製造、 精密鋅金部品製造、 電気機器・産業機械組立、 プレス金型の設計・製作、 金属パイプ加工、 環境関連機器の開発・製造・販売
【事 業 所】	営業所=名古屋市 海外工場=中国、タイ

長浜市細江町に本社を構える高橋金属株式会社は、金属部品加工業を主力とし、電気機器の組立や環境関連機器の製造販売を行うなど、幅広い分野に挑戦を続けている企業です。

同社は1940年(昭和15年)の創業で、初代社長の高橋文雄<sup>たかはしふみお</sup>氏によって「高橋鋅金」として立ち上げられました。当時は長浜町三ツ矢(現在の長浜市三ツ矢元町)の自宅兼工場を拠点に、寺社仏閣や民家の銅板屋根葺きを手がけていました。その7年後、ヤンマーディーゼル長浜工場からエンジン燃料タンクの製造を受注したことを足がかりとして、当時最先端であった自動車のシートベルトのバックルを製造するなど、本格的に工業鋅金分野に参入しました。その後も順調に業績を上げ、1966年(昭和41年)以降、細江町にプレス工場、金型工場、鋅金工場を相次いで竣工し、大手メーカーとの取引も増加しました。

現在の主力事業である部品加工事業では、最新機器を導入して、高精度の多種多様な金属部品を製造しています。なかでも1台のプレス機で複雑な形状の部品加工とネジ目の加工を同時に行う「型内ネジ転造加工技術」は、「ものづくり日本大賞」特別賞を受賞し、同社の高い技術力が広く認知されました。

環境商品事業では、「洗淨」という分野に着目し、水道水を電気分解し洗淨液に変える技術を独自開発し、洗剤を使用しない高機能洗淨機の製造販売を行っています。主に金属部品の洗淨で活躍し、自動車メーカーや家電製品メーカーなどで幅広く用いられています。

また、最近では、精度の高い金属加工技術を活かして、長浜でおなじみの水陸両用バスを製造するなど、未開拓ジャンルでのシェア獲得を目指しています。

## グループ経営理念

『私達の成長で世の中が良くなる会社に』

- ・人間尊重を礎に 人をつくり人をまもる働き甲斐No.1企業としての成長
- ・進取果敢に挑み 自ら価値を創造するニッチトップ連邦企業としての成長
- ・社会使命に尽す 社会課題をビジネスで解決する社会的企業としての成長

# セネファ株式会社



#### 企業データ

【本 社】長浜市内保町 77 番地  
【創 業】1949 年 (昭和 24 年)  
【事業内容】お灸製造販売、医療用具、  
化粧品等の製造販売  
【事 業 所】東京営業所、大阪出張所、  
九州出張所、札幌出張所

江戸時代は、お灸による治療が盛んで、お灸に使う「もぐさ」はヨモギを採取し、乾燥させ、葉の裏の白い毛を石臼にかけて生産していました。中でも「伊吹もぐさ」は百人一首にも歌われ、伊吹山の高地に自生するヨモギが最良とされていたようです。

長浜市野瀬町では、地域の伝統産業のひとつとして、古くからもぐさが作られ、全国への行商を行い、明治から大正にかけて20軒以上の業者があったといえます。

セネファ株式会社は、1949年（昭和24年）に東浅井郡浅井町野瀬（現在の長浜市野瀬町）に「押谷静慰商店」として創業しました。創業当初から伊吹もぐさの製造・全国販売を行い、1965年（昭和40年）には社名を「総本舗・千年堂」に変更し、1982年（昭和57年）には「株式会社千年堂」、1991年（平成3年）には「セネファ株式会社」に変更して現在に続いています。

本社は、長浜市内保町にあり、東京や大阪、九州、札幌といった全国に営業拠点を持ち、お灸製造販売、医療用具・化粧品等の製造販売を行っています。

お灸は、熱かったり、皮膚に跡が残ることが難点とされていました。しかし、1970年（昭和45年）にブランド名を「せんねん灸」とした後、厚紙等でできた台座の上にもぐさがあるため、熱を直接感じにくいお灸（台座灸）や、火を使わないお灸を発売するなど、お灸の難点を克服する工夫を凝らしています。

二千年もの歴史があるお灸を新しい方法で伝えているセネファ株式会社は、「健康こそは最大の幸せ」をモットーに、人と社会に役立つ「快適」を創造する企業を目指しています。

#### 企業理念

人と物、人と自然、人と環境をみつめ、独自の分野を開拓し、人と社会に役立つ  
快適創造企業をめざします





## Ⅳ．新たなまちづくり



長浜のまちづくりは、1983年（昭和58年）の長浜城再興を契機に「長浜出世まつり」が開催されたことが原点と言えるでしょう。1984年（昭和59年）に定められた「博物館都市構想」の理念のもと、歴史的・文化的な景観を大切にしたい町並みづくりやイベントの創出など、市民が主体となってまちづくりに取り組んできました。

なかでも「まちの顔」ともいえる中心市街地（まちなか）では、昔ながらのたたずまいの中に黒壁スクエアをはじめとする新しいまちづくりの息吹が融和し、“レトロモダン”な観光地として年間200万人を超える観光客が訪れています。

一方で、少子高齢化や人口減少による過疎化問題、空き家・空き店舗問題など、いま日本の多くの地域が抱える課題に直面しており、新しい時代や環境に合ったまちづくりが求められています。

ここでは、昭和から平成にかけて取り組まれてきた長浜のまちづくり事例を紹介します。10年、20年先も夢と希望が持てる、魅力あるまちづくりを実現していくためのヒントが隠れているかもしれません。

# 大学の誘致

長浜市内には、現在、「滋賀文教短期大学<sup>おんきょう</sup>」と「長浜バイオ大学」の2校が開校しており、湖北地域はもとより、全国各地から学生が通っています。長浜市ぐらゐの規模の地方都市において、2つの大学があることは、全国的に見てもたいへん珍しいことです。「地域文化を育てる大学の誘致<sup>ゆうち</sup>」は、市民にとって長年の念願であり、今日にいたるまで多くの人々の苦勞がありました。

## 滋賀文教短期大学

滋賀県3番目の短期大学として、1975年（昭和50年）4月に開校した私立「滋賀文教短期大学」は、岐阜県にあった岐阜短期大学をキャンパスの全面移転により誘致したもので、学校敷地を無償で提供するなどの努力により実現しました。また、長浜市寺田町の小林清八郎さん<sup>こばやしせいぱちろう</sup>（元海軍兵学校文民教授・漢文）が同校で教鞭<sup>きょうべん</sup>を執っていたことも、誘致への大きなきっかけとなっています。

現在の学科は、国文学科と子ども学科の2学科で、全国でも有数の担任制による少人数教育の実施により、教員のきめ細やかな指導やサポートが特徴の短期大学です。国文学科は、「司書」の資格が取得でき、全国でも数少ない「書道」に関する専門科目の設置もしています。

また、子ども学科では、2018年度（平成30年度）から、長浜市の幼児教育職への学校推薦制度が新設され、多くの卒業生が市内の幼稚園等で活躍しています。





## 長浜バイオ大学

滋賀文教短期大学の誘致後も、長浜市は大学誘致による地域の活性化を重要課題と考え、1970年代後半から、JR田村駅西側の土地を大学誘致のための用地として準備し、さまざまな取り組みを展開してきました。また、人口の減少や経済の衰退化が目立ち始め、いかにして産業の活性化による若者の定住化を図るかが大きな課題でもありました。

一方、長浜バイオ大学の母体である「関西文理総合学院」は、予備校の経営のほかに、「宝酒造」との共同で、バイオ単科の専門学校も運営しており、条件が整えば、将来のバイオ産業を担う人材を育成する大学を設立したいという思いをもっていました。

両者の思いと、2000年代に始まった国を挙げての「バイオテクノロジー」に対する関心の高まりが追い風となり、2003年（平成15年）、「日本でただ一つのバイオ系単科大学」として長浜バイオ大学は開校しました。

また、長浜バイオ大学は、「産学官」<sup>さんがくかん</sup>（※）が協力して設立した大学で、開設にかかる事業費70億7000万円のうち、滋賀県と長浜市が5割強を補助し、開設に合わせ、周辺には、バイオ関連企業の集積を目的とする「長浜サイエンスパーク事業」が始まり、産業の活性化も図られてきました。

現在の学科は、フロンティアバイオサイエンス学科・メディカルバイオサイエンス学科・アニマルバイオサイエンス学科の3学科で、「バイオの総合大学」として、実験・実習が多いカリキュラムが組まれています。また、産学官連携を目的の一つとする「実学（理論よりも実用に重きを置く学問）」の学校として、隣接する長浜サイエンスパークの中核施設としての役割も担っています。

※産学官…業界（民間企業）、学校（教育・研究機関）、官公庁（国・地方公共団体）の三者



## 長浜城の再興



長浜市のシンボルともいえる長浜城（長浜市長浜城歴史博物館）は、1983年（昭和58年）4月5日にオープンしました。

長浜城の歴史は浅井氏に代わって北近江三郡の領主となった羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）が、1574年（天正2年）に湖畔の今浜（のちに長浜と改める）に築城したことに始まります。秀吉はこの城を足がかりに出世の道を歩んでいきました。その後、柴田勝豊（柴田勝家の甥）、山内一豊、内藤信成、内藤信正が城主となりましたが、豊臣家滅亡後は、廃城となってしまいました。長浜城の建物や石垣は彦根城の築城に再利用されたといわれています。

1910年（明治43年）当時の長浜町長吉田作平の提案によって、本丸跡とその周辺が買収され、公園となりました。その後、大正天皇御大典記念事業による整備や区画整理事業などによって、少しずつ整備拡張され、面積15.6ヘクタールの「豊公園」として、市民の憩いの場となりました。

この豊公園に城が再興されるきっかけとなったのは、1978年（昭和53年）3月に策定された「長浜市総合計画」のなかで「活力に満ちた風格のあるまち」という都市目標の実現を目指して、市が民俗資料館の建設を計画したことにあります。1980年（昭和55年）、この計画を知った縮緬会社（南久ちりめん）社長の長谷久次さん（神照町）と長谷定雄さん（京都市）兄弟が「できることなら



城型の建物を」という申し出とともに1億5千万円の寄附を行ったのです。長谷兄弟の申し出にこたえて、市は市制40周年の記念事業として、城郭様式の歴史民俗資料館建設構想を公表しました。

これをきっかけに「長浜のシンボルとして秀吉ゆかりの城がほしい」という市民運動が盛り上がり、市民をはじめとするおよそ8,200人から約4億3千万円もの寄附金が集まりました。これに国の補助金、市の予算等をあわせた10億円あまりの工事費がかけられ、1981年（昭和56年）6月から建設が始まりました。

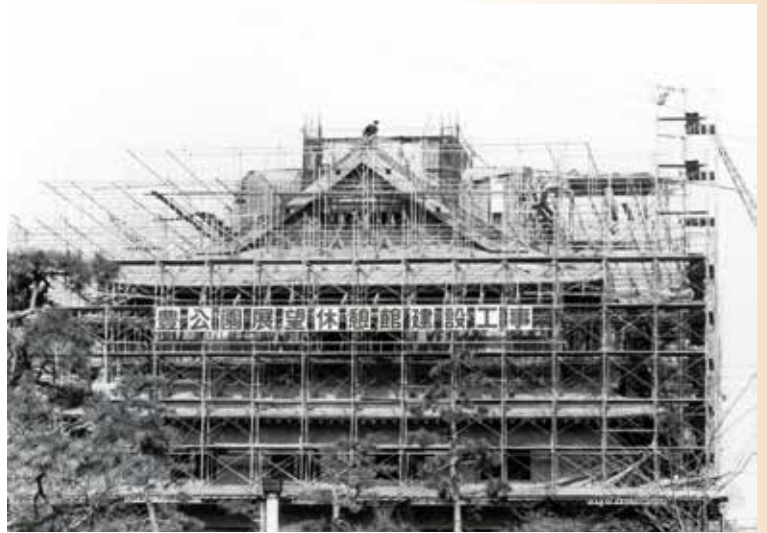
建物の建設では、絵図や縄張図など、秀吉が築城した城の姿を知る手がかりとなる史料が残っていなかったため、東京工業大学名誉教授の藤岡通夫ふじおかみちお氏の設計指導のもと、天正期の城郭が想定されました。

こうして、構想から5年後の1983年（昭和58年）4月に市民待望の“昭和の長浜城”が完成。天守閣とやぐらを持つ鉄筋コンクリート造り、3層5階建て、屋根に葺かれた64,100枚の瓦には一枚一枚に寄附をした市民の名前が書きこまれました。

長浜城の再興を記念して、同じ年の4月29日から5月8日までの10日間、豊公園一帯で「長浜出世まつり」が開催され、のべ52万人の人々でにぎわいました。

このような盛り上がりは、これまでになかったことで、市民がふるさとの素晴らしさや魅力に目を向け、誇りと自信を高めるきっかけとなりました。長浜城再興を実現した市民パワーと、「やればできる」という自信は、さまざまなアイデアを生み出し、これが現在も開催されているまちづくり関係のイベントや事業に受け継がれていると言えるでしょう。

延床面積およそ1,837平方メートルの長浜城の内部は、展示室、収蔵庫、茶室、展望台などを備え、長浜を中心とする湖北地域の考古、歴史、民俗、美術工芸資料の収集、保存、調査研究、展示をおこなう歴史博物館として、多くの市民や観光客に利用されています。



長浜城開館イベント

# 曳山博物館の開館



長浜市の春の風物詩である長浜<sup>ひきやままつり</sup>曳山祭。絢爛豪華な曳山と可憐<sup>かれん</sup>な子ども歌舞伎<sup>かぶき</sup>で知られるこの祭礼を世界に発信するために、「創造し発展する地域博物館」をコンセプトとして開館したのが長浜市曳山博物館です。

高さ11mの巨大な展示ケースには、本物の曳山を毎年4基ずつ交替で展示します。また、歌舞伎<sup>かぶき</sup>の稽古<sup>けいこ</sup>から講演会・イベントまで対応できる小ホールと和室を備え、さらには国内でも類をみない大規模な曳山修理ドック（修理などを行うための設備）を設置しています。



はじめて曳山博物館建設が長浜青年会議所<sup>(※)</sup>によって提唱されたのは、祭が国重要無形民俗文化財に指定された翌年の1980年（昭和55年）で、中心市街地<sup>(※)</sup>の衰退が祭礼の継承にも影響しはじめていました。曳山祭の保存伝承とまちづくりの拠点となるべき理想の博物館を模索して、山組と市民と行



政が議論に議論を重ねました。

その間、今に続く市民イベントの創出や商店街の景観改修、黒壁ガラス館のオープン、JRの直流化、NHK大河ドラマ博覧会の開催などにより、観光客が増えまちが活気を取り戻してきました。こうした長浜のまちづくりの歴史と期待を背に、2000年（平成12年）、曳山博物館が開館したのです。

曳山の展示替えは「曳山交替式<sup>こうたいしき</sup>」と呼ばれ、祭さながらの入れ替え作業にのべ500人の市民が参加しています。曳山修理ドックでは曳山の解体修理が相次いで行われています。博物館で稽古している「三役修業塾<sup>さんやくしゅうぎょうじゅく</sup>」の塾生は、振付・太夫・三味線として長浜や米原・垂井の曳山祭にも出演しています。

2016年（平成28年）には長浜曳山祭がユネスコ無形文化遺産に登録されました。

曳山博物館には、この広く世界に認められた祭をこれからも保存・伝承するために、地球規模で考えながら地域の視点で活動することが期待されます。

※青年会議所…明るい豊かな社会の実現を理想とし、責任感と情熱をもった青年有志の団体。  
 ※中心市街地…人口が集中し、商業、行政機能が充実した中心となる地域。





# 株式会社黒壁の設立



北国街道沿いに続く古いまちなみの一角にある総称「黒壁<sup>くろかべ</sup>スクエア」は、長浜随一の観光スポットとして、多くの人々にぎわっています。明治時代の第百三十銀行長浜支店の建物を改装した「黒壁ガラス館」を中心に、ガラスショップや工房、ギャラリー、体験教室、カフェなどの店舗が点在します。

第百三十銀行長浜支店は、洋風土蔵造りの建物で、外壁が黒漆喰<sup>くろしっくい</sup>仕上げであったことから、“黒壁銀行”や“黒銀行”という愛称で人々に親しまれていました。その後、この建物は、明治銀行長浜支店、紡績会社の配送所、煙草専門公社の営業所、長浜カトリック教会などに利用されました。

1987年（昭和62年）、長浜カトリック教会が郊外に新築移転し、旧銀行の建物が第三者の手に渡って解体されるという話が浮上りました。まちの景観と雰囲気を作ってきた風情あるこの建物を何とか残したいと立ち上がった市民が、保存の道を模索し、市民有志と行政からなる第三セクター（※）方式の会社を設立し、買い取ることになったのです。そして、残っている民家や商店などの古い建物を活かし、まち全体を博物館のようにするという「博物館都市構想」のもと、活用方法が考えられました。

こうして1988年（昭和63年）4月に資本金1億3千万円（長浜市4千万円／民間8社9千万円）の



「株式会社黒壁」が設立され、代表取締役社長に長浜市出身の長谷定雄<sup>はせさだお</sup>さんが就任しました。長谷さんは、長浜城再興のきっかけとなった多額の寄附をおこなったことでも知られます。

いまでは、黒壁といえば「黒壁ガラス」ですが、黒壁のメインコンセプトとしてガラスが決定したのは、会社設立後のことです。黒壁の役員による議論と調査の積み重ねの中で、歴史性、文化芸術性、国際性をもったガラスに注目し、北海道小樽や広島、海外へ視察に出かけ、ガラス事業の展開を決意しました。

1989年（平成元年）7月に黒壁スクエアが開業し、明治の建物や伝統的な町並みとガラスの組み合わせ、市と市民有志の出資による第三セクターという経営方法などが話題を呼び、多くの観光客が長浜を訪れるようになりました。

黒壁銀行の保存・再生をきっかけに、秀吉の城下町建設から約400年の伝統に支えられた長浜の商店街と住宅街は、その良さを残しながら徐々に生まれ変わり、今では滋賀県の一大観光スポットとして知られるようになりました。一から新しい観光スポットを作るのではなく、もともとあった



歴史的建造物を保存・活用することによって、まちなみに統一感を出し、“レトロモダン”な雰囲気を創ることに成功した黒壁スクエア。行政主導ではなく、市民が主体となったまちづくりの成功例の一つと言えるでしょう。

今では年間200万人以上の観光客が訪れ、2020年（令和2年）1月19日には、累計来街者が5,000万人を達成しました。

※第三セクター…国や地方公共団体（第一セクター）と民間企業（第二セクター）の共同出資によって設立される事業体。

# JR 北陸本線の直流化



皆さんは、電車が走る仕組みを知っていますか？電車は、線路の上に設置してある架線<sup>かせん</sup>という電線から電気を取り入れながら走っています。そのため、自動車のように燃料を補給しなくても長い距離を走ることができます。鉄道会社の変電所では、発電所から送られてくる電気を使いやすい電気に変えて、架線<sup>かせん</sup>や駅、信号機などに送っています。

電車を動かす電力は、大きく分けて「直流電化方式」と「交流電化方式」があります。電気の「直流」と「交流」は、理科の授業で習ったことを覚えている人も多いでしょう。これは、電気の流れ方のことで、直流は、電気が導線の中を流れるとき、電流や電圧が変化しない流れ方で、交流は、電流や電圧が周期的に変化している流れ方です。例をあげれば乾電池が直流で、家庭のコンセントは交流です。

1956年（昭和31年）に東海道本線が全線電化、北陸本線はその翌年に電化されました。このとき、東海道本線は日本の鉄道の大半に採用されている直流電化方式であったのに対し、長浜駅を通る北陸本線はアップダウンが激しいことや雪が多いことなどの理由から交流電化方式が採用されました。しかも、当時の国鉄（現在のJR）が米原駅を境にして大阪、金沢、名古屋の各鉄道管理局に分かれていたため、京阪神・中京方面と湖北地域を結ぶ直通列車は、電化によってほとんどな



なくなってしまったのです。これにより、米原駅での列車の乗り換えが不便になり、また、自動車の急速な普及や北陸本線のダイヤ削減などもあり、長浜駅の利用者数が大幅に減少し、それともなって長浜駅周辺の商店街も次第にさびれていきました。



1981年（昭和56年）頃、市民や行政のあいだに、北陸本線の直流化によつて京阪神からの直通電車を走らせ、まちの賑わいを取り戻そうという動きが出てきます。

1986年（昭和61年）には、湖北地域の市町と県で「北陸本線直流化促進期成同盟会」が発足し、促進のためのパンフレット作成や住民アンケートが実施されるなど、関係機関への働きかけが繰り返されました。

1987年（昭和62年）に国鉄が分割民営化されると、直流化の要望が検討されるようになり、この動きをいっそう活発化させようと、「北陸本線直流化推進市民の会」が署名運動をはじめ、6万6千人もの署名を集めてJR西日本株式会社に提出されました。

その後、県のバックアップもあり、1990年（平成2年）に、JR西日本、滋賀県、長浜市、近江町（現在の米原市）、湖北町（現在の長浜市）の間で直流化に関する基本合意が交わされ、覚書と協定書が正式に調印されました。

長浜市では、駐車場や駐輪場など駅周辺環境整備を行い、商工会議所や地元銀行とともに直流化の費用を負担しました。そして、米原－長浜間が直流に変更され、1991年（平成3年）9月14日、待ちに待った京阪神からの直通電車が運行されたのです。

直流化によって、電車の本数が増加し、長浜駅発の直通電車が走るようになりました。長浜駅の乗降客も倍増し、京阪神への乗車時間が短縮されたことで地元から電車で通勤・通学する人が増え、長浜を訪れる観光客が増加するなど、めざましい効果がありました。

その後、長浜以北の自治体（当時）や福井県敦賀市から直流区間のさらなる延伸の要望が出され、2006年（平成18年）10月21日に北陸本線の長浜－敦賀間、湖西線の永原－近江塩津（ともに長浜市）間の直流化が開業しました。こうした交通体系の整備は地域経済の発展に大きく貢献し、長浜の活性化につながりました。



れ、2006年（平成18年）10月21日に北陸本線の長浜－敦賀間、湖西線の永原－近江塩津（ともに長浜市）間の直流化が開業しました。こうした交通体系の整備は地域経済の発展に大きく貢献し、長浜の活性化につながりました。

# まちなか(中心市街地)の活性化

まちなか(中心市街地)は、商業、居住、インフラ等の都市機能が集積する「まちの顔」であり、地域の経済社会の発展に重要な役割を果たしています。まちなかの衰退が全国的な課題となっている中、長浜市では1980年(昭和55年)頃から、まちなかを活性化させ、人を集めるための取り組みが行われてきました。これまでに紹介した長浜城の再興や株式会社黒壁の設立、曳山博物館の開館などもその一つです。



長浜きもの大園遊会

市民と行政が力を合わせた30年来の取り組みにより、長浜城を訪れる人が大幅に増加し、シャッターで閉ざされていた空き家・空き店舗は新たな商機能として復活をとげ、かつてのにぎわいを取り戻すことに成功しました。

一方で、まちなかに住む人々が減少し、それにもなあって地域のコミュニティ機能が低下するなど、新たな課題も生まれました。そこで、長浜市では、まちなか活性化の第2ステージとして、「まちの活力」、「にぎわいと交流」、「まちなか居住」の3つのキーワードをコンセプトに新たな取り組みを進めています。

現在、まちなかを中心にさまざまなイベントが行われ、これらを総称して「長浜出世まつり」と呼んでいます。出世まつりは、1983年(昭和58年)4月、秀吉の出世城といわれる長浜城が再興されたのを記念して始まりました。第1回出世まつりは、豊公園を中心に開催されましたが、翌年には、まちなかへ場所を移し、「長浜きもの大園遊会」が始まりました。長浜の市街地一帯を全国から集まったおよそ千人の着物姿の女性がそぞろ歩く日本一の着物イベントで、絹織物「浜ちりめん」のふるさと長浜を盛り上げようと始まりました。古い長浜の町並みに着物姿が映え、長浜が1年でもっとも華やぐ1日です。



アートインナガハマ

また、1987年(昭和62年)11月には、豊公園の自由広場で第1回芸術版楽市楽座(現在のアートインナガハマ)が開催。全国からさまざまなジャンルの芸術家が集まり、絵画・陶芸・彫刻・木工など手作りの作品を展示、販売、実演する青空市です。現在は毎年10月の第一土曜日に開催される国内最大級のアートの祭典として、多くの来街者を迎えています。

「<sup>ほうこう</sup>豊公まつり」では、秀吉の天下人への足がか





豊公まつり

りとなった賤ヶ岳合戦の凱旋（戦いに勝って帰ること）の様子を表現した武者行列や稚児行列が行われます。長浜の市街地は秀吉が城下町を築いたことで、大いに栄えました。秀吉没後に長浜の人々は秀吉を敬って、豊神社を建立し、徳川の時代にあっても密かに秀吉を祀り続けたといわれています。その後、明治時代になり、豊国大明神の神号が復活し、豊国神社として今もその功績をたたえています。

「長浜火縄銃大会」は、第1回長浜出世まつりで、国友（長浜市）・種子島（鹿児島県）・堺（大阪府）の合同火縄銃演武が行われたことに始まります。種子島に鉄砲が伝来した翌年の1544年（天文13年）、国友で鉄砲の生産が始まったと伝わります。国友は戦国時代、信長、秀吉、家康らの庇護を受け、堺と並ぶ鉄砲の一大産地として栄えました。

現在は、「豊公まつり」の前日、長浜城歴史博物館前の広場を会場に、鉄砲ゆかりの町から招いた鉄砲隊による火縄銃大会が行われています。

「近世城下町ふるさとまつり」は、2013年（平成25年）から始まった歴史の新しいまつりです。長浜が近世城下町のルーツであることに注目し、今日までのおよそ440年間歩み続ける長浜のまちを検証し、情熱を受け継ぐ人々が未来へ向けてさらなるエネルギーを創り出していくことを目的に、武将パレードや楽市楽座、交流会サミットなど多彩なイベントが開催されます。

ほかにも、「長浜きものの集い」や「長浜きもの早春のつどい」などもあり、長浜ではまちなかの活性化と新たな市民文化の創造を目的に、工夫を凝らしたイベントが1年を通して行われ、かつて城下町として栄えた長浜の魅力を発信し続けています。

さらに、2006年（平成18年）と2010年（平成22年）の2度の市町合併で市域が広がったことにより、まちなか以外の各地域でも市民が主体となった個性的なイベントが開催されています。



近世城下町まつり

# 4つの大河ドラマ博覧会

長浜市は、日本で一番、NHK大河ドラマを、地域の観光戦略や文化施策に活用してきた自治体と言えるでしょう。

博覧会が地域に与える影響力は、たびたびその会場となっている長浜城歴史博物館の入館者数を見れば一目瞭然です。例えば、通常10万人から14万人の入館者数が、1996年度（平成8年度）は59万人、2006年度（平成18年度）は34万人でした。これはいずれも、表1に見る大河ドラマ博覧会が長浜で行われた年でした。また、2011年度（平成23年度）の「江・浅井三姉妹博覧会」の経済効果は、約230億円とされています。

長浜の町は、豊臣秀吉が最初に城持ち大名になった場所ということから、1981年（昭和56年）放送の『おんな太閤記』など、何度も大河ドラマに取り上げられてきました。しかし、ドラマを本格的に地域づくりに活用しようとしたのは、1996年（平成8年）放送の『秀吉』からでした。前年から開催の意向はありましたが、なかなか準備が進まず、博覧会実行委員会が立ち上がったのは、すでにドラマの放送が始まった後でした。「北近江秀吉博覧会」と銘打ち、会期は4月7日から11月30日まででしたが、終わってみれば全体で82万人余りの来場者でにぎわい、大成功の博覧会となりました。

この「北近江秀吉博覧会」は、石川県金沢市から出島二郎さんというプロデューサーを迎え、「変革と自由」をテーマに、映画館と商家を改造したパビリオンを中央会場とし、大通寺と長浜城歴史博物館の3つの会場で開催されました。そこでは、いくつか興味深い取り組みが行われています。たとえば、会場の案内係は55歳以上の人々がシルバーコンパニオンとして活躍しました。また、「秀吉青春大学」という講座を設けて、行政と民間の若手が一緒になって、来訪者を案内する企画も行われました。

この「北近江秀吉博覧会」のノウハウを持って行われたのが、2006年（平成18年）の「北近江一豊・千代博覧会」です。この博覧会は、近隣の木之本町・虎姫町・近江町（当時）と連携した博覧会であったことが特徴です。

また、2011年（平成23年）の「江・浅井三姉妹博覧会」は、前年の市町合併を受け、初めて長浜市街地外の浅井や小谷で、会場を設定する広域の博覧会となりました。さらに、2014年（平成26年）の「黒田官兵衛博覧会」は、木之本に会場を設定し、長浜市北部への集客を狙ったものでした。

大河ドラマ博覧会は、地域に大きな経済的効果をもたらすものですが、官民一体となった運営を行うことで「市民の輪」が育ち、その連携が以後の「まちづくり」の力になっていることが大切でしょう。近い将来、長浜出身の武将・石田三成がNHK大河ドラマに取り上げられるとしたら、過去4回の経験の上に、新たな「市民の輪」が築かれた博覧会が開催できることでしょう。



表1 4つの大河ドラマ博覧会一覧

博覧会名	大河ドラマ	会期	会場	総入場数	特徴
北近江秀吉博覧会	秀吉(第35作) 原作=堺屋太一	1996年4月7日 ～11月30日	①中央会場 (映画館・商家を改造) ②大通寺③長浜城	823,100人	シルバーコンパニオン、 秀吉青春大学
北近江一豊・千代博覧会	功名が辻(第45作) 原作=司馬遼太郎	2006年1月8日 ～11月30日	①長浜城②曳山博物館 ③大通寺	660,069人	近隣町(木之本町・虎姫町・近江町)との連携
江・浅井三姉妹博覧会	江～姫たちの戦国～ (第50作) オリジナル脚本= 田淵久美子	2011年1月15日 ～12月4日	①プラザふくらの森 ②小谷城下特設会場 ③長浜黒壁・歴史ドラマ 50作館 (商業施設を改造)	1,183,627人	2010年の市町合併後の 広域博覧会
黒田官兵衛博覧会	軍師官兵衛(第53作) オリジナル脚本= 前川洋一	2016年1月19日 ～12月28日	①木之本交遊館 ②長浜城③曳山博物館	350,344人	黒田家発祥の地の整備



北近江秀吉博覧会(1996年)



北近江秀吉博覧会(1996年)



北近江一豊・千代博覧会(2006年)



江・浅井三姉妹博覧会(2011年)



黒田官兵衛博覧会(2016年)

## ◆長浜の近代化年譜

西暦	元号	長浜のできごと	社会のできごと
1868	明治元年		神仏分離令が出され、以後、廃仏毀釈運動が起こる。
1869	明治2年		琵琶湖で最初の蒸気船「一番丸(5トン・12馬力)」が大津―海津間に就航。
		京都に日本最初の小学校が誕生する。	
		明治新政府が、日本への鉄道導入と共に、東京―横浜間、京都―神戸間、琵琶湖畔―敦賀間の鉄道敷設を決定する。	
1870	明治3年	柴田源七が製糸工場をはじめめる。	膳所城の取り壊しが始まる。
1871	明治4年		松田道之が大津県の県令(県知事)に就任する。
		県ではじめての小学校「第一小学校」が創立する。(現在の長浜小学校)	廃藩置県によって各藩の跡に「県」が置かれる。(西大路県、水口県、膳所県、山上県、大津県、宮川県、朝日山県、彦根県)
		小船町(現在の朝日町)の尾板六郎が蒸気船を購入する。	近江国を二分して「大津県」と「長浜県」が誕生する。
		西本町(現在の元浜町)の下村耕作宅で郵便業務がはじまる。	
1872	明治5年	長浜所属の蒸気船「湖龍丸(11トン・8馬力)」が長浜―大津間に就航する。	大津県を「滋賀県」に、長浜県を「犬上県」と改める。
		「学制」の発布にともない、長浜市域各地に学校が創立される。	「学制」が発布される。滋賀県と犬上県が合併して「滋賀県」となる。
			新橋―横浜間にわが国初の鉄道が開通。
		長浜の大火	「国立銀行条例」が公布され、東京第一・横浜第二・新潟第四・大阪第五国立銀行の4つの銀行が設立される。
1873	明治6年	長浜生糸改会所が設置される。	「地租改正条例」が公布される。
		長浜所属の蒸気船「長運丸(8トン・8馬力)」が長浜―大津間を運航。	滋賀県内の各地で小学校の設立・開校があいつぐ。
1874	明治7年	神戸町(現在の元浜町)に木造3階建の擬洋風建築の校舎が新築され、「開知学校」と改称される。	大阪―神戸間に鉄道が開業する。
		蒸気船「長運丸」が唐崎沖で沈没し、乗客十数名が亡くなる。	
		この年、浅見又蔵・柴田源七らが浜ちりめんを海外へ輸出する。	
1876	明治9年	「汽船取締会所」の支局が長浜に置かれる。	滋賀県が蒸気船の検査や運航を管理するため、大津に「汽船取締会所」を設ける。
			「国立銀行条例」の改正により、全国に国立銀行が設立されるようになる。



西暦	元号	長浜のできごと	社会のできごと
1877	明治10年	京都―神戸間の鉄道開通。	京都―神戸間の鉄道開通。
		長浜町民有志が政府に「長浜停車場」の市内設置を請願する。	西郷隆盛らが鹿児島で挙兵して西南戦争が起こる。
		県下最初の国立銀行「第二十一国立銀行」が神戸町に開業する。	初の大型船「江州丸(64トン)」と「湖幸丸」が就航。
1878	明治11年	浅見又蔵がアメリカで開催された万国博覧会に浜ちりめんを出品し、好評を得る。	
		浅見又蔵らが、連絡運輸の実施について政府に出願。鉄道の代用として、大津―長浜間に蒸気船を運航することを申し出る。	汽船取締会所の組織変更が行われ新たに「汽船取締所」が設置される。「汽船取締規則」が定められる。
		長浜において蒸気船「湖東丸」が就航。	
1879	明治12年	浅見又蔵が浜ちりめんを試売のためにニューヨークへ輸出する。	
		鉄道の敷設に合わせ、「長浜丸(木造114トン)」が建造され、大津―長浜間を就航。	学制が廃止され、教育令が制定される。
1880	明治13年	浅見又蔵が長浜―関ヶ原間の私設鉄道の敷設許可を請願する。	米原―敦賀間の鉄道敷設が決定。
		浅見又蔵が、長浜港の改修工事許可を県に願い出る。その後、工事が始まる。	京都―大津間の鉄道が開業する。
		米原―敦賀間の鉄道敷設工事が着工されるが、のちに長浜が敦賀へのルートの起点となる。	
1881	明治14年	浅井郡が東西二郡に分割される。	
		長浜町に坂田・東浅井郡役所が置かれる。	この年、自由民権運動が盛り上がる。
1882	明治15年	長浜―敦賀(金ヶ崎)間の鉄道が、柳ヶ瀬トンネル部分をのぞいて開通する。北船町に長浜停車場(長浜駅)が開業。(日本最古の駅舎として現存)	「日本銀行」設立。兌換銀行券による全国的な流通紙幣の統一がはかれる。
		「太湖汽船会社」が創立される。	
		長浜―関ヶ原間の鉄道敷設工事が始まる。	
1883	明治16年	第百三十国立銀行の長浜支店が開業。(本店は大阪市)	郵便条例が施行される。
		長浜港の改築工事が完成する。太湖汽船が港の使用を開始する。	鹿鳴館の開館式が行われる。
		長浜―関ヶ原間の鉄道が開通する。	
		琵琶湖で初めての鋼鉄製蒸気船「第一太湖丸(516トン)」・「第二太湖丸(498トン)」が定期航路に就航。	下郷傳平によって大阪市に下郷製紙所が設立される。
1884	明治17年	柳ヶ瀬トンネルが完成(全長1352.1メートルで当時日本最長)し、長浜―敦賀間の鉄道が全通。トンネルに伊藤博文揮毫の「萬世永頼」の石額が掲げられる。	
		日本で最初の鉄道連絡船が長浜―大津間の営業を開始する。	

## IV. 新たなまちづくり

西暦	元号	長浜のできごと	社会のできごと
1884	明治17年	関ヶ原－大垣間の鉄道が開通し、長浜－大垣間が全通、開業式が行われる。同時に長浜港の築港式も行われる。長浜は水陸交通のターミナルとしてにぎわいをみせる。	関ヶ原から大垣まで鉄道が伸びる。
		開知学校に新たな校舎（北舎）が増築される。竣工式開催。	天気予報が開始される。
1885	明治18年	長浜－関ヶ原間に上坂停車場が設置される。（およそ9カ月で廃止）	内閣制度が確立し、第一次伊藤博文内閣が成立する。
		浅見又蔵が太湖汽船会社の頭取に就任する。	
		治水のための「田川カルバート」が完成。	
1886	明治19年	近江縮緬絹縮業組合および取締所が大手町（現在の元浜町）に設立される。	
		開知学校が学制改革にともない「長浜学校」と改称する。	
		武豊（愛知県）から神戸（兵庫県）までを鉄道と人力車と蒸気船で結ぶ連絡輸送が実施され、長浜も輸送ルートに組み込まれる。	
1887	明治20年	浅見又蔵が、天皇の行在所（休憩所）として建築した「慶雲館」が完成する。	東海道線名古屋－大垣間が開通する。
		明治天皇と皇后が鉄道と汽船を利用して長浜へ行幸啓。慶雲館で休憩の後、東京へ戻る。	敦賀（福井県）－武豊（愛知県）間の鉄道が開通する。
		下郷傳平が近江製糸株式会社を設立、工場を長浜八幡宮の北（宮前町）に建設する。	
1888	明治21年	長浜－大津間の鉄道建設が始まる。	
		近江縮緬絹縮業組合が近江縮緬業組合となる。	
1889	明治22年	静岡－浜松間の鉄道が開通し、新橋（東京）から長浜が一本につながり、直通列車が一往復運行する。	大日本帝国憲法が発布される。
		東海道線の新橋－神戸間が全通し、長浜－深谷間は運行休止、鉄道連絡船は廃止される。敦賀線（のちの北陸線）米原－長浜間の鉄道が開通する。	市制・町村制が施行される。
1890	明治23年	長浜－関ヶ原間の鉄道が廃止となる。	「教育に関する勅語（教育勅語）」が公布される。
			琵琶湖疎水が完成する。
1891	明治24年	長浜－関ヶ原間の鉄道と東海道線（米原から関ヶ原へ向かう）の合流地点に深谷貨物駅が新設される。	大津事件
		10月28日、岐阜県西部を震源とする濃尾大地震（マグニチュード8と推定）が起こり、長浜地域も大きな被害を受ける。	
1892	明治25年	西田天香が滋賀県必成社の主監として北海道へ渡る。	



西暦	元号	長浜のできごと	社会のできごと
1893	明治26年	長浜学校が「長浜尋常高等小学校」と改称し、神前町（現在の宮前町）に分教場を設ける。	彦根測候所（現在の彦根地方気象台）が設置される。
1894	明治27年	神戸町に第六十四国立銀行の長浜支店が開業する。（本店は大津市）	日清戦争が始まる。
1895	明治28年	銀行条例・貯蓄銀行条例が改正され、各地に銀行設立ブームが起こる。第二十一国立銀行の設立メンバーが神戸町に長浜貯金銀行を設立する。昭和12年（1937）に湖北銀行と合併するまで営業を行う。	日清講和条約が下関で調印される。三国干渉が起こる。
		北船町に長浜銀行が設立される。	
1896	明治29年	県内の記録上最大の水害が発生し、長浜の各地でも大きな被害を受ける。	
		長浜－深谷間の鉄道貨物運転が休止される。	
1897	明治30年	第二十一国立銀行が「株式会社二十一銀行」となる。昭和4年（1929）江北銀行・伊香銀行と合併し新たに湖北銀行となるまで普通銀行業務を行う。	貨幣法が公布され、金本位制が確立する。
1898	明治31年	近江縮緬業組合が浜縮緬同業組合と改称する。	大津に県下最初の市制が施行される。
1899	明治32年	東海道線が深谷経由から柏原経由に切り替えられ、長浜－深谷間は廃線となる。	
1900	明治33年	長浜－関ヶ原間の廃線路が国道となり、乗合馬車が運行する。「馬車道」と呼ばれるようになる。	
		株式会社百三十銀行長浜支店の建物が大手町（現在の元浜町）に新築される。（現在の黒壁本館）	
1901	明治34年	浜蚊帳合名会社（のちの樋口蚊帳製織工場）が設立される。	
1902	明治35年	長浜駅舎の北寄りに新たな駅舎（2代目）が建設され、旧駅舎の使用中止。	日英同盟協約が調印される。
1903	明治36年	下郷傳平久成が下郷共済会を組織する。	大阪で第5回内国勸業博覧会が開催される。
		長浜尋常高等小学校が高田町に完成する。	
1904	明治37年	西田天香が長浜で「大悟」し、「新生活」に入る。	日露戦争が始まる。
1905	明治38年	近江ヴェルベット合名会社が北郷里村石田（現在の石田町）に創立される。	瀬田川に南郷洗堰が完成する。
		長浜貯蓄銀行が設立される。	日露講和条約が調印される。
1906	明治39年	長浜銀行と近江銀行が合併し、長浜銀行本店は近江銀行長浜支店となる。株式会社百三十銀行長浜支店が、明治銀行長浜支店となる。（本店は名古屋市）	

## IV. 新たなまちづくり

西暦	元号	長浜のできごと	社会のできごと
1906	明治39年	滋賀県蚕種製造所（のちの滋賀県蚕業試験場）が東浅井郡曾根（現在の曾根町）に開設される。	南満州鉄道株式会社（満鉄）が設立される。
		天鷲絨製織合名会社が北郷里村石田に設立される。	
		貨物を保管する琵琶倉庫株式会社が南呉服に設立される。	
1907	明治40年	杉野文弥が私財を投じて伊香郡木之本村（現在の木之本町木之本）に江北図書館を設ける。	太湖汽船会社が専用の貸切遊覧船「八景丸」を就航させ、観光事業に参入する。
1908	明治41年	北門前町（現在の宮前町）に蚕種製造販売の近江蚕業合資会社が設立される。	北陸本線が全通する。
1909	明治42年	8月14日、姉川付近を震源とした姉川地震（マグニチュード6.8）が発生し、長浜の各所に大きな被害をもたらす。	この年、日本の生糸輸出量が中国を抜いて世界第一位となる。
		姉川地震に対して明治天皇の命を受けた北条侍従が視察と慰問を行う。	
1910	明治43年	「豊公園」の開設が許可される。	太湖汽船が鉄道院と連携して、竹生島・彦根への船車連絡回遊券を発売する。
		近江浜縮緬製織合名会社が設立される。	
1911	明治44年	長浜町立実科高等女学校（長浜北高校の前身）が開校。旧開知学校を校舎として用いる。	中国で辛亥革命がおこる。
1912	明治45年 大正元年	株式会社大塚商店工場が長浜町三ツ矢（現在の元浜町）に設立される。	長浜出身の山岡孫吉が、山岡発動機工作所（のちのヤンマー）を設立、農作業に役立つ製品の開発に取り組む。
		浜縮緬業界が力織機を導入する。	
1913	大正2年	大塚商店製織工場が長浜町三ツ矢で創業する。	
		『近江長濱町志』の編さんが下郷共済会で始まる。	
		西田天香が京都の郊外・鹿ヶ谷に修養道場「一燈園」を建設する。	
1914	大正3年	この年、御大典（天皇陛下の即位にかかわる儀式）記念事業として、豊公園に桜の木500本を植えるなどの整備が行われる。	第一次世界大戦が始まる。
1915	大正4年	下郷共済会文庫が第一小学校跡地に建築され、開館式が行われる。	京都御所で大正天皇の即位の大礼が挙行される。
1918	大正7年	県が伊吹山に気象観測所を設置する。	
		北船町（現在の朝日町）の元本陣の吉川三左衛門の屋敷地が、下郷共済会によって運動公園となり、「長陽園」と命名される。	
1919	大正8年	この年、湖北乗合自動車による長浜－東上坂間の乗合バス運行が始まる。	ベルサイユ講和条約が調印される。



西暦	元号	長浜のできごと	社会のできごと
1920	大正9年	この年、戦後の恐慌により生糸・繭価が暴落し、養蚕農家が大きな経済的打撃を受ける。 鐘淵紡績株式会社が明治山から豊公園にかけての一带を工場用地として買収する計画を立てる。	株価等が暴落し、第一次世界大戦後の戦後恐慌がはじまる。
1921	大正10年	長浜城跡の保存案が長浜町会で議決される。 下郷共済会文庫敷地内に博物館「鍾秀館」が開館する。 浜ちりめんの生産者一人あたりの平均織機台数が約8台になる。 西田天香の講和集『懺悔の生活』が刊行され、爆発的なヒットとなる。	首相の原敬が暗殺される。 ワシントン会議が開催される。
1923	大正12年		関東大震災が起こる。
1924	大正13年	長浜町開町350年記念祭が開かれる。	度量衡法が改正され、メートル法が基本となる。
1929	昭和4年	二十一銀行・江北銀行・伊香銀行が合併して、湖北銀行が創立される。本店を神戸町にあった旧二十一銀行本店に置き、各所に出張所を開設する。	ニューヨーク株式市場が大暴落し、世界大恐慌が始まる。
1930	昭和5年	鐘淵紡績株式会社長浜工場が南呉服町（現在の鐘紡町）に完成、県下屈指の大工場となる。	
1931	昭和6年	北陸本線の坂田駅、田村駅が開業する。	近江絹糸株式会社彦根工場が創立される。
1932	昭和7年	山岡孫吉が長浜に工場を建設、戦後長浜の各地に工場を建設する。 不況のため明治銀行長浜支店（もと百三十三銀行長浜支店）の建物が個人の手に入る。	
1935	昭和10年	下郷共済会鍾秀館の収蔵品が2万5千点（そのうち約1万点が考古遺物）におよぶ。 この頃の浜ちりめんの生産者一人あたりの平均織機台数が11～15台の規模となる。	
1936	昭和11年	2代目浅見又蔵から慶雲館と庭園が長浜町に寄贈される。	二・二六事件が起こる。
1938	昭和13年	県下初の県立保健所が開設される。	国家総動員法が公布され、以後、各産業の軍需産業への転換が進む。
1939	昭和14年	9月9日、琵琶湖の水位がマイナス103センチメートルとなる。	第二次世界大戦が始まる。
1940	昭和15年	奢侈品等製造販売制限規則が公布・施行され、長浜の織物業者やビロード業界は大きな打撃を受ける。	日独伊三国同盟が調印される。
1941	昭和16年	この年、浜ちりめんや紬工場の大半が軍需工場に転業する。	太平洋戦争が始まる。
1943	昭和18年	市制施行により、「長浜市」が誕生する。	軍需工場への学徒動員が開始される。
1945	昭和20年	鐘紡長浜工場へアメリカ軍戦闘機が小型爆弾を投下する。	日本がポツダム宣言を受諾して降伏する。終戦を迎える。

## 長浜の近代史や企業人を知るための参考図書

この冊子に登場した長浜の企業人や近代史のことを知りたい!と思ったときに役立つ本や資料を紹介します。

- 『長浜小学校百年誌』  
編集・発行：長浜小学校百年誌編集委員会 発行年：1971年
- 『私の履歴書』  
著者：山岡孫吉 発行：ヤンマーディーゼル株式会社 発行年：1973年
- 『写真集・長浜百年』  
編集：長浜市総務部企画課 発行：長浜市 発行年：1980年
- 『転進、転進 50年 大塚産業株式会社の軌跡と商いの精神』  
著者：中村基衛 発行：大塚産業株式会社 発行年：1986年
- 『読本 長浜の歴史』  
編集・発行：長浜市立教育研究所 発行年：1988年
- 『長浜の人物』  
編集・発行：長浜市立図書館 発行年：1993年
- 『近江商人と長浜商人』（1994年8月～1995年11月「滋賀夕刊」連載）  
著者：滋賀夕刊新聞社創業者 押谷盛利
- 『西田天香没後30年記念 西田天香 長浜が生んだ偉大な思想家』  
編集：市立長浜城歴史博物館 発行：西田天香没後30年記念事業実行委員会  
発行年：1998年
- 『長浜市史 第4巻 市民の台頭』  
編集：長浜市史編さん委員会 発行：長浜市 発行年：2000年
- 『敦賀長浜鉄道物語～敦賀みなとと鉄道文化～』  
編集・発行：敦賀市立博物館 発行年：2006年
- 『大いなる挑戦の軌跡 近江ベルベット株式会社100周年記念誌』  
発行：近江ベルベット株式会社 発行年：2006年
- 『琵琶湖の船が結ぶ絆 -丸木船・丸子船から「うみのこ」まで-』  
企画・編集：滋賀県立安土城考古博物館・長浜市立長浜城歴史博物館  
発行：滋賀県立安土城考古博物館 発行年：2012年
- 『公文書でたどる近代滋賀のあゆみ』  
企画・編集：滋賀県 県政史料室 発行：サンライズ出版株式会社  
発行年：2013年
- 『地域情報誌 みーな Vol.120 北陸本線ものがたり 長浜-敦賀間の130年』  
編集：長浜み～な編集室 発行：長浜み～な協会 発行年：2014年
- 『明治150年 長浜の近代化』  
企画・編集・発行：長浜市長浜城歴史博物館 発行年：2018年



## 長浜市内の歴史文化施設

長浜市内には、この冊子で紹介した内容はもちろん、それ以外の歴史や文化を紹介する歴史文化施設がたくさんあります。

市内の歴史文化施設を訪れて、長浜の魅力や素敵などところを見つけてみませんか。

### 長浜市長浜城歴史博物館

長浜市公園町 10-10 ☎ 0749-63-4611

琵琶湖畔に建つ秀吉の出世城。内部は歴史博物館で、湖北・長浜のあゆみや秀吉と長浜について紹介しています。最上階の天守展望台からは琵琶湖や市街地が一望できます。

- 開館時間：9時～17時（入館受付は16時30分まで）
- 入館料：大人（高校生以上）410円／小中学生200円
- 休館日：年末年始（12/27～1/2）、展示替等により臨時休館あり



### 浅井歴史民俗資料館

長浜市大依町 528 ☎ 0749-74-0101

戦国大名浅井氏ゆかりの資料を展示する郷土学習館や、江戸期の庄屋を移築利用した「七りん館」、浅井地域の伝統産業、養蚕と鍛冶の歴史を紹介した「糸姫の館」、「鍛冶部屋」があります。

- 開館時間：9時～17時（入館受付は16時30分まで）
- 入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円
- 休館日：月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12/27～1/5）

### 高月観音の里歴史民俗資料館

長浜市高月町渡岸寺 229 ☎ 0749-85-2273

「観音の里」にある資料館です。観音像をはじめとする仏像や、ユネスコ「世界の記憶」に登録された「雨森芳洲関係資料」、伝統行事「オコナイ」に関する資料を展示しています。

- 開館時間：9時～17時（入館受付は16時30分まで）
- 入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円
- 休館日：火曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12/29～1/4）

### 長浜市曳山博物館

長浜市元浜町 14-8 ☎ 0749-65-3300

ユネスコ無形文化遺産「長浜曳山祭」のすべてを紹介する博物館です。精巧な飾り金具や木彫、美しい塗りなど、豪華絢爛な実物の曳山を見ることができます。

- 開館時間：9時～17時（入館受付は16時30分まで）
- 入館料：大人（高校生以上）600円／小中学生300円
- 休館日：年末年始（12/27～1/3）

### 国友鉄砲の里資料館（国友鉄砲ミュージアム）

長浜市国友町 534 ☎ 0749-62-1250

戦国時代、日本の歴史を変えた「国友の火縄銃」、日本で初めて天体観測をした「国友一貫斎」、そのほか国友の歴史や文化を紹介するミュージアムです。

- 開館時間：9時～17時
- 入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円
- 休館日：年末年始（12/28～1/3）

### 五先賢の館

長浜市北野町 1386 ☎ 0749-74-0560

長浜市田根地区ゆかりの5人の先人（相応和尚、海北友松、小堀遠州、片桐且元、小野湖山）の業績やゆかりの資料を紹介しています。遠州流庭園には編み笠門や水琴窟があります。

- 開館時間：9時～17時（入館受付は16時30分まで）
- 入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円
- 休館日：水曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12/29～1/3）

## 小谷城戦国歴史資料館 長浜市小谷郡上町 139 ☎ 0749-78-2320

小谷城跡のふもとにある資料館です。戦国時代に北近江を支配した浅井氏三代の栄華と滅亡までの軌跡を城跡からの出土品や絵図、ジオラマなどで紹介しています。

■開館時間：9時～17時（入館受付は16時30分まで） ■入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円  
■休館日：火曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12/28～1/4）

## 東アジア交流ハウス雨森芳洲庵 長浜市高月町雨森 1166 ☎ 0749-85-5095

長浜出身とされる儒学者「雨森芳洲」の業績や「朝鮮通信使」に関する資料などを展示しています。芳洲庵の建物は、芳洲の生家跡に建てられています。

■開館時間：9時～16時 ■入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円  
■休館日：月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12/29～1/4）

## 余呉茶わん祭の館 長浜市余呉町上丹生 3224 ☎ 0749-86-8022

県の無形民俗文化財に指定されている余呉町上丹生の丹生神社の大祭「茶わん祭」をテーマにした資料館です。館内には祭りのシンボルである曳山のレプリカや衣装、道具などを展示しています。

■開館時間：10時～16時 ■入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円  
■開館日：土曜日・日曜日（冬期は休館）

## 北淡海・丸子船の館 長浜市西浅井町大浦 582 ☎ 0749-89-1130

かつて琵琶湖での湖上水運を担った丸子船<sup>まるこぶね</sup>をテーマにした資料館です。現存する丸子船や古文書などの関連資料を展示しています。

■開館時間：9時～17時（ただし11/1～3/31までは10時～16時） ■入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円  
■休館日：火曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12/27～1/5）

## 菅浦郷土史料館 長浜市西浅井町菅浦 ☎（長浜観光協会北部事務所）0749-82-5909 /（長浜市役所歴史遺産課）0749-65-6510 /（長浜城歴史博物館）0749-63-4611

菅浦地域の文化財の魅力を紹介する史料館。国宝「菅浦文書」にふれられるモニターなどがあります。

■開館時間：10時～16時 ■開館期間：4月1日～11月末日の毎週日曜日（開館日以外の予約は2人以上から対応）  
■協力金：大人（高校生以上）300円／小中学生100円

## 長浜鉄道スクエア 長浜市北船町 1-41 ☎ 0749-63-4091

長浜旧駅舎、長浜鉄道文化館、北陸線電化記念館の3つの施設をとおして、日本の鉄道の歴史を見て、ふれて、知ることができる鉄道の博物館です。

■開館時間：9時30分～17時（入館受付は16時30分まで） ■入館料：大人（高校生以上）300円／小中学生150円  
■休館日：年末年始（12/29～1/3）

## ヤンマーミュージアム 長浜市三和町 6-50 ☎ 0749-62-8887

子どもから大人まで楽しめる体験型ミュージアム。ヤンマーの歴史や創業者・山岡孫吉の事績などを映像、シミュレーターなどを通して体験学習できます。

■開館時間：10時～18時（入館受付は17時まで）※事前予約優先制 ■入館料：大人（高校生以上）600円／小中学生300円  
■休館日：月曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始（12/29～1/6）



この冊子は、長浜市市民協働部歴史遺産課と産業観光部商工振興課で作成しました。  
執筆メンバーは下記のとおりです。

### ■歴史遺産課

おおた	ひろし
太田	浩司
やまおか	かずひろ
山岡	万裕
いちむら	たえこ
市村	妙子
あまもり	ゆきひこ
雨森	之彦
なんぶ	ますみ
南部	真住
いけざき	よういち
池崎	陽一
うしたに	よしのぶ
牛谷	好伸
こやま	あすか
古山	明日香
きたがわ	りょう
北川	遼
ふくなが	なおこ
福永	斉子
さとう	あさみ
佐藤	麻美

### ■長浜城歴史博物館

ひでひら	ふみただ
秀平	文忠
ふくい	ちえ
福井	智英
さかぐち	やすあき
坂口	泰章
おかもと	ちあき
岡本	千秋
くろいわ	かほ
黒岩	果歩

### ■浅井歴史民俗資料館

いとう	きよし
伊藤	潔
とみおか	ゆみこ
富岡	有美子

### ■高月観音の里歴史民俗資料館

ささき	えつや
佐々木	悦也
にしはら	たけひろ
西原	雄大

### ■お世話になった皆さん（敬称略・順不同）

大塚産業クリエイティブ株式会社  
江一株式会社  
南久ちりめん株式会社  
株式会社山正  
近江ベルベット株式会社  
琵琶倉庫株式会社  
カネ上株式会社  
株式会社材光工務店  
江洲産業株式会社  
長浜信用金庫  
明文舎印刷商事株式会社  
八ヤミ工産株式会社  
KBセーレン株式会社長浜工場  
株式会社山久  
東亜工業株式会社  
株式会社材信工務店  
株式会社立売堀製作所  
エルナープリントドサーキット株式会社  
ワボウ電子株式会社  
高橋金属株式会社  
セネファ株式会社  
押谷産業株式会社  
株式会社ヤマダホームズ  
株式会社マルシバ  
大倉工業株式会社  
ヨシボー株式会社  
ヤンマーミュージアム  
公益社団法人長浜観光協会  
公益財団法人長浜曳山文化協会  
下郷 壽太郎  
富田 光彦  
吉田 一郎  
水掬 純子  
小堀 裕司

## 長浜温故知新プロジェクト 「長浜の企業人列伝 ～知恵と努力が“みらい”をつくる～」

---

発行日：2020年（令和2年）3月30日

企画：長浜市市民協働部歴史遺産課、産業観光部商工振興課

編集：長浜市長浜城歴史博物館

制作・印刷：谷口印刷株式会社

発行：長浜市市民協働部歴史遺産課、長浜市長浜城歴史博物館

〒526-8501 滋賀県長浜市八幡東町 632 番地

歴史遺産課 TEL.0749-65-6510

長浜城歴史博物館 TEL.0749-63-4611

<https://www.city.nagahama.lg.jp>

歴史遺産課 Mail rekishi@city.nagahama.lg.jp

長浜城歴史博物館 Mail rekihaku@city.nagahama.lg.jp



